Blessless Blood

ツキトユキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｂｌｅｓｓｌｅｓｓ　Ｂｌｏｏｄ

【Ｎコード】
Ｎ９９０６Ｋ

【作者名】
ツキトユキ

【あらすじ】
貧乏な少女のもとに突然舞い込んできた伯父の遺産相続話。
向かった先にあったのは、人の狂気が魔物の形となって蠢く魔法犯罪者たちの街。
そこで、遭遇する闇を抱える人々と少女の記憶の彼方に追いやられた過去。
伯父の本当の遺産に近づくにつれ、明かされていく己の正体。
少女が自らの中にある闇の存在に気付いた時、その街で手にするのは……

※主人公は女の子ですがほんのりＢＬ要素があります。

登場人物紹介（前書き）

読む前の参考にどうぞ
逆ハー気味ですが微糖
それぞれのキャラ別エンドを想定しています

登場人物紹介

【木下真央】
黒髪黒目。
母が借金を抱えている以外は普通のバイトに勤しむ高校生。
伯父の遺産を相続するために危険区域に足を踏み入れる。
途中からは男のふりをして行動することに。

【聖】
オレンジ色の髪の少年。真央の幼馴染。
壊れた電化製品を直すのが趣味であり特技。
真央には親切だが、他の人にはそうでもない。

【玄九郎】
真央が煉獄街に来る途中で出会ったおじさん。
鳥に関するライカンスロープであるらしく、カラスたちと仲が良い。
表向き親切で良い人のようだが……
隻眼で髪は少し長め。

【黄泉】
青みがかかった黒髪の青年。
盲目だがイヌ科のライカンスロープで強い。
奴隷だった時の調教の名残で思考が幼く、それに伴う言動も子供っぽい。
なぜか真央に懐いてついてくる。

【流】
万屋をしている青年。
綺麗な顔をしているが蜘蛛のライカンスロープで戦闘能力は高い。

真央の母や伯父を知っている様子だが……

【鵺】
神出鬼没の合成獣型のライカンスロープ。
大量虐殺を繰り返しているため煉獄街では最も恐れられている。

【黎】
煉獄街を裏で動かしている組織プルガトリオのボス。
白に近い髪の色をした美青年。
黄泉の元飼い主。
女嫌いで男のライカンスロープ収集が趣味。

【カイナ】
ドラッグの売人をしているピンクの髪の少年。
可愛い顔をしているがそこら辺のライカンスロープより強い。
ライカンスロープを人間扱いしないが、彼らに歪んだ愛情を抱いている。

第一話　伯父の遺産

平穏とはいとも容易く呆気なく崩れ去るものだ。
闇は足音を忍ばせて獲物に近づいてくる。
それは、ゆっくりと静かに……しかし、確実に日常を蝕んでいく。

薄暗い路地を全速力で走る。息苦しいが、運動はどちらかといえば得意な方なので、足の運びはまだ軽い。しかし、それでも限界が来るまで走り続けるのは……今後のことを考えれば、それはむしろ危険な気がした。

大きなポリバケツを見つけて、その影にしゃがみこむ。ゴミが入っているのだろう隣のバケツからは腐臭が漂ってくる。不快だが、場所を選んでいる余裕など今はない。

「はぁ……はぁ……
ここまで来れば……大丈夫か？」

呼吸を整え、耳をすませつつ、これからどうしようかと考える。走っている間はそんなことを考える余裕などなかった。いや……そもそも、現在地すら把握できていない状況なので、考えても意味などないような気もする。そう思いながらも本格的に悩もうとしていると……それを邪魔する足音が聞こえてきた。次いでガラが悪そうな男の声や獣の唸り声のようなものも聞こえてくる。

「ちっ、あのガキどこに行ったんだ！？
俺のことコケにしやがって……許さねぇ」

思わず舌打ちする。その声は間違いなく私を追ってきている男たちの声だった。しつこい奴だ。一体どこまで付いて来るんだ！？名前も知らない追っ手に毒づきながら、再び逃走を開始する。

「なんで私がこんな目に……」

いくら困っても、あんな話に乗るべきではなかったかもしれない……

私は、授業が終了して、帰路についていた。
私、　木下　真央は高校生活の大半をバイトに費やす日々を送っている。そのため、学校帰りに友達と寄り道するなんてことは一月に一度あればいいところだ。もっともバイトがなければ遊びに行く……というわけにもいかないのだが。今日の場合は、バイトはない日だけれど、生憎友達と遊びに行くだけのお金がなかった。
アパートの階段をそっと駆け上がる。錆びていて危険そうだけど、よく通る場所なのであまり意識することはない。ただ、急いでいる時でも「そっと」通過するのは、住民の間ではもう決まり事のようなものだった。
建物の壁や玄関の扉も色がはげていて、知らない人が見たら廃墟だと思うかもしれない。玄関の扉を開けて中に入るとやっと人が住んでいる気配がする。五畳ほどの室内は、隣に大きな高層ビルが建っているため晴天の日でも少し薄暗い。洗濯物の乾きは遅いし、風呂とトイレは共用だったりする。二十四世紀も半ばだというのに、このレトロ過ぎる住居は正直言って不便だった。
それでも贅沢は言っていられない。うちは　木下家は母子家庭で借金が多い。何が原因でできた借金で正確な金額すら私は知らないのだが、いくら返済してもそれはなかなか無くならなかった。私の学校も、奨学金と私のバイト代がないと通えない状況なのだ。
当然だけど、魔法が存在するようになった現在でも、できることとできないことがある。私にとってできないことの一つが、この借金を消すことだ。

二十三世紀末、人間は自分たちが暮らす世界と隣あった世界を発見した。

行き来こそ不可能だったが、とある一人の科学者はその世界に存在する未知のエネルギーをこちら側の世界に持ち出すことに成功する。彼はそのエネルギーを”魔力”と名付けた。その後、魔力の研究は進み、魔力が新たなエネルギー資源として活用され始めるのに、そう時間はかからなかった。

人々は、魔力を用いた技術も誕生しそれらを”魔法”、魔力を研究する者たちを”魔術師”と呼んだ。

名前の通り、魔力はかつて人々が思い描いた魔法のような物事を可能にしていった。

そんなことを世界史の授業でならったけれど……世の中が便利になっても貧富の差なんてものは影響がない。なくなるどころか、むしろ広がっている気もする。まぁ、私は学校にも通えているし、飢えない程度の食事はできているから、良い方なんだろうけど。

「ただいまー」

返事がないことが分かっていても、一応帰宅の挨拶はする。暖房ももちろん付いていなかったので、吐く息は室内でも白かった。とは言っても、この部屋の中に暖房器具そのものがない。理由は言わずとももう分かるだろう。電化製品を買ったり、電気代を払ったりする余裕がないからだ。今では安価な魔法製品や魔力なんてものも市場に出回っているけれど、家ではそれも使えない。

そりゃあ魔力を使って動く魔法製品に憧れた時期もあったが、魔力を家に供給するにはそれなりの設備がいる。設備に投資するだけのお金がこれまたなかった。

少し早いが、夕食の準備をしようと冷蔵庫の中を覗いていると、頭に何かがあたる。ふと、下を見てみると水溜りが出来ていた。

「……ん？　うわっ、雨漏りしてる！？」

私は慌てながら雑巾を探した。

今日は寒い上に雨が降っている。ボロアパートの二階にあるこの部屋は、数年前からこうやって雨漏りすることがよくあった。
その辺の器で適当に水を受けながら、床を雑巾で拭く。
「母さんは反対してるけど、またバイト増やそうかなぁ。」
建物のぼろさに少し悲しくなり、そう呟いてみる。別に今の生活に大きな不満があるわけではないが、借金がさっさとなくなってくれるならそれにこしたことはない。それに、借金返済生活が終わったらシャンプー代なんか気にせず髪を伸ばすことができる。家で髪を切らずに美容院にだって行ける。
友人たちが言うには、私は美少年顔……らしい。それが理由で割のいいバイトが見つかることもあるのだが、正直あんまり嬉しくない。少年にしか見えなくても、私は正真正銘”女”なのだから。だから、せめて髪を伸ばしたいなぁ、と思っていた。

食事の準備を終えて、明日の授業の予習をしていると玄関をノックする音が聞こえた。チャイムもあるのだが、生憎故障中なのだ。それにしても、一体誰だろう？　母が帰ってくるにはまだ早い時間帯だった。
玄関の前にいたのは、以前母と話しているのを見かけたことがある女性だった。明るめの茶色い髪にダークブラウンの瞳。存在感のある華やかな容姿をしていたため記憶に残っていたのである。濃紺のスーツを着た彼女は派手な装飾品などは一切身に付けてはいなかったが、なんとなく高級感が漂っていた。それは、仄かに漂ってくる香水の香りに対する感想でもあった。家に来る人も珍しいが、これほど不似合いな客となると余計だ。
しかも、黒崎樹理と名乗ったその女性は予想もしなかったことを告げた。
「あなたの伯父木下真人は、財産全てをあなたに残すという遺言を残されました」と。

話によれば、黒崎さんは魔術師だった私の伯父（そんなものいると聞いたことがない）の部下だったのだそうだ。そして、先日亡くなった伯父は姪の私に遺産を残した、とのこと。

そこまではまだいいが、その内容が胡散臭い上に危険な臭いがする。正直関わっていいものか悩むようなものだった。一億円とその他様々な権利や価値あるデータ……総額数億円相当が私のものだといきなり言われても現実味がない。そう……そもそもの問題はあれだ。

「私……伯父がいると聞いたことがなくて。その……会ったこともない私に、まさか……」

遠まわしに疑うような言葉を返しつつ戸惑うような視線を送っていた私に、黒崎さんは一枚の写真を見せた。それがなければ、そんな話は嘘でしょう？　と最終的には言っていたかもしれない。

「生前……あなたが幼い頃会ったことがある、とおっしゃっていましたよ。これはその時の写真です。あなたは覚えていないかもしれませんが……」

その写真には、確かに幼い頃の私が写っていた。横にいる白衣の男性が問題の伯父らしい。言われてみれば、顔つきが少し自分と似ている気がした。写真を撮った時の記憶はない。しかし、伯父ではない、という確信もない。なぜなら、実は、私はこの写真を見るまで忘れかけていたが、私には幼い頃の記憶がないからだ。小さい頃のことなんて皆覚えてないものでしょう？　と友人に言って「少しぐらいは覚えているもの」と答えられショックを受けた記憶がある。それでも、普段は覚えていなくても困らないので、すっかり忘れていた。

警戒しつつも信用し始めた私に気付いたのか、黒崎さんは遺産相続の条件の話を始めた。条件はたった一つ。手渡された地図に赤く印を付けられた場所まで行くこと。ただ、それだけだった。

黒崎さんが、去った後の部屋は以前よりも少し地味に見えた。ぼんやりと話の内容について思考をめぐらす。あまりにも現実味を帯びない内容……今思い出してみると、白昼夢を見ていたのでは？とすら思う。彼女の残り香と手元にある地図だけが、先ほどのことが現実であったことなのだと主張している。

「何にせよ……嘘臭いのは確かだよな」

私は一人で考え事をしていると、つい思っていることを口にしてしまうことがある。当然返事なんて返ってこない……はずだった。

「何が？」

「会った覚えも居た覚えすらない伯父が私に遺産を残したらしいんだよね。そんなのあり得ないよ！？

……って、うわっ、母さん帰ってたの？」

考え事をしていると周囲に気が向かないのは私の悪い癖だ。気付くと目の前にいつも目にしている私の母……　木下杏の顔があった。しかも、よく見ると母さんの顔は青ざめている。そして、いきなり怒ったような表情になって、私を詰問し始めたのだから訳が分からない。

「ちょっと、　真央、そんな話誰から聞いたの！？」

「えっ……綺麗な黒崎樹理っていうおねぇさんが現れて、話していったんだけど……

母さんどうしたの？顔色悪いよ」

怒って赤くなっているかと思えば、黒崎さんの名前を聞いた母の顔はまた血の気が引いてきていた。

「大丈夫よ。

いい？　　真央。あの女の人には二度と会わないで頂戴！　彼女が言っていることを信じてはだめよ」

妙に念を押す母の様子に、ますますあの女の正体と思惑に対する

興味は深まったが、私はそれを忘れることにした。母を悲しませるようなことはしたくなかったから……

それから数日後……　あんなことがなければ、私は遺産相続の話なんて思い出さなかったかもしれない。

いつも通り家に帰宅すると、その日は私より早く帰宅しているはずの母の姿がなかった。代わりに居たのは、黒崎樹理。そして、数少ない家具には差し押さえの貼り紙。何か悪いことが起きたのだ、とそれだけは分かった。

黒崎さんの話を聞く間、私は妙に冷静だった。いつもそうなのだ。私は、普段はどちらかというと感情的なタイプなのに、危険な状況や普通ならパニックに陥っても仕方ない状況になると冷静になる。そんなところがあった。

母さんは事故で入院したらしい。幸い命に別状はないようだ。差し押さえは、借金の返済日が今日までで、間に合わなかったから。母さんの入院の準備をしながら私は決意した。

伯父の遺産を相続しようと。

母さんを見舞ってから出かけようかとも思ったが、それはやめた。母さんの顔を見ると決意が鈍る気がしたからだ。　入院の荷物は、黒崎さんに預ける。

その時だけ、あまり感情を表さない彼女の顔に暗い影が落ちた気がした。

翌朝、私は、手にした地図を見つめながら溜め息を吐いた。こんなことなら……母の顔をもう一度見ておけばよかった……

地図をもとにたどり着いた先……そこにあったのは、悪名名高い

アノ……煉獄街。幼い子供ですら知っている有名な危険区域だった。

第二話　煉獄街

忌まわしき魔獣の花嫁。
彼の美しい白き闇が求めたこの世で唯一の存在。
彼女は帰還した。
死と狂気が巣食うこの街に。

煉獄街。そこは、一般社会から断絶した空間。私が生まれる少し前に制定された魔法規制法により一般社会からはじき出された魔術関係者の一部は一つの過疎化した地域に移り住んでいった。そこに出来た街は、”煉獄街”と呼ばれている。今の煉獄街は、魔法規正法に違反したものだけではなく、他の犯罪者たちも多く暮らしているという。詳細は知らないが、天国に近く、地獄と隣り合わせの場所という意味で煉獄街と呼ばれているらしい。私からすれば、そんな街のどこが天国に近いのかさっぱり分からない。

……何故こんなところに遺産相続のために指定された場所があるんだ？　私の伯父は魔術師で、魔法規制法違反者だったのか？　そうなのか？　騙されたんじゃないか、という考えも浮かんでは来るが、ここまで怪しいと逆に嘘ではない気もしてくる。
「おいおい……迷子か？　ここはお前のような奴が、来るところじゃないぞ」
何かが崩れるような音と共に聞こえてきた声にゆっくりと振り返る。煉獄街の入り口にはゴミが積まれた地域がある。崩れたのはそのゴミだった。自分の世界に入り込んでいた私は、またも背後から近づいてくる気配に気付かなかったのだ。

己の迂闊さに呆れつつ声を掛けてきた人物を見る。相手は、３０代後半ぐらいの男性だった。くたびれたコートを着ていて、顔の片側に傷がある。彼は隻眼だった。無精ひげを生やしていて、気だるそうな表情をしてこちらを向いている顔は無骨だが整っているようにも見える。単に私が煉獄街を前にして怖気づいているせいかもしれないが、彼は堅気ではない気配を持っている気がした。

男が何者なのかは気になる。しかし、私には今はそれよりも確認したいことがある。

「あ、あのちょっと聞きたいことがあるんですけど……」

まさか質問が来るとは思っていなかったのだろう男……いやこの際もう少し親しみを込めておじさんと呼んでおこう……おじさんは意外そうな顔をしながらも、それに応じた。

「……何だ？」

「ここって、アノ……煉獄街……ですよね？」

「……まだここは”アノ”煉獄街の近くだ。もうちょっと進んだところに入り口がある。

まさか、煉獄街に用があるっていうんじゃないだろうな？」

自分でも間抜けな質問だとは思ったが、できれば否定が返ってきてほしかった。だけど、おじさんは否定しない。そして、少し警戒するような視線を送ってきている。あの街に用があるなんて言えば、それは当たり前なのかもしれない。

「事情があって……どうしても行きたい所があるんです」

武器らしい武器も持たず、強そうにも見えない。そんな私が煉獄街に行こうとしていると聞いたら、誰でも無謀だと言うだろう。実は喧嘩には自信があるが、相手にもよる。煉獄街の住人相手に勝てる自信はない。

初対面の人間に何でこんな話をしているんだろう。そう思いなが

ら、自分は煉獄街に行かなければいけないんだな、と覚悟が出来てきた。馬鹿にされるかと思った。帰った方がいいと注意されるかも、と。だけど、おじさんは違った。

気付けば、おじさんは、怪訝そうな、だけど少しこちらを哀れむようなそんな表情になっていて……思ってもいなかった提案をしてきたのだ。

「ワケありか……まぁ、あんなところに用がある奴なんて、そんなもんだよな。

何なら俺が案内してやろうか？」

一瞬良い人かもしれないと思う。だけど……おじさんの口振りを考えると、彼はやはり煉獄街の住人かもしれない、という不安があった。信用するのは……いや関わるのは危険だ。

「ご親切にどうも。でも、遠慮しておきます」

「お前……綺麗で真っ直ぐな目をしてるな。お前みたいな坊主は……あの街では苦労するぞ」

「……は？」

案内を断ったことで返ってきた意外な反応に少し驚く。苦労はするだろうとは、私自身予想している。気になったのは他の部分だった。

”綺麗で真っ直ぐな目”そんなふうに言われたことなんて、今までなかった。一瞬褒められたのだろうかと思ったが、逆かもしれないと思い直す。ここは煉獄街入り口。ここに似つかわしくない目をしている、と、彼はそう言っているのかもしれない。そして……”坊主”というのはどうも自分を指しているらしい。男……だと思われている。よくあることだったが、少しショックだった。

無言で固まっている私に対し、少し困ったような表情になったおじさんは言葉を続けた。
「いや……案内を拒否したのは正解だ。あの街では、他人を信用してちゃあ生き残れない。ただ、一つ忠告しておいてやろう。そういう真っ直ぐな目を人に向けるのは止めた方がいい。変なのに目を付けられるぞ。俺みたいなのにもな……」
また、目？　自分自身がどんな目を相手に向けているかなんて、バイト先では気をつけることもあったけれど、普段は意識することなんてない。止めた方がいいと言われても、それは難しそうだ。
「俺は、玄九朗だ。信用するかしないはともかく、困ったことがあったら、俺のことを探してみるといい。報酬は貰うが……あの街では役には立つ自信がある。
じゃあな、坊主。縁があったら、また会おう」
人を信用してはいけない、といいつつも今度は少し矛盾したセリフを残し、おじさんは去っていった。煉獄街の中へ。やはり彼は、煉獄街の住人だったらしい。額は不明だけど、私には報酬を払う余裕はない。きっともうおじさんとは縁がないだろう。誰の手も借りることが出来ない無法地帯へ、私は向かわなければいけないのだ。

深呼吸をして心を落ち着かせる。そして、私は煉獄街へと足を踏み入れた。数分間得に何も考えずに歩を進める。遠くから人の声や獣の咆哮が流れてくる以外は、何も聞こえない。普段なら不安になる要素だったけれど、近くに生き物がいる気配がないことに今は寧ろ安堵していた。その場に似つかわしくない声が聞こえるまでは。
「おかえりなさい」
ゴミが不法投棄された地区を抜け街中に入った時、そう聞こえた気がした。まだ幼い少年の声だった。それは、私に対して放たれた言葉ではないことは明白だ。

けれど、思わず声のした方を向く。視界に入ってきたのは走り去る子供の後姿。急に湧いてきた衝動に突き動かされるように、それを見た私は走り出していた。追う理由などないはずなのに……

その後、私は、子供を見失い、すでに意味をなくしかけている地図を眺めながら途方に暮れる。別に子供を追っていて道を見失ったわけではなかった。煉獄街入り口までは正確に導いてくれた地図は、ここに入った途端にその価値を失っていたのだ。

道が瓦礫に埋もれて通行不可能になっていたり、目印のはずの建物や看板がすでになかったりする。荒れ果てて整備するものもいないこの地区では、よくあることではないかと思う。私が住む地区も、ここまでではないにしろ似たようなものだからだ。

仕方なく人の気配がする方に向かう。もはや、誰かに道を聞くぐらいしか良い方法が思いつかなかった。あとは、その相手が親切な人であることを祈るばかりだ。（あまり期待できないが）

祈りは届かなかった。聞こえてくる柄の悪い声に頭を抱えそうになる。

近づいて行ってみると、どうも一人の少年に数人の二十歳前後の男たちが絡んでいるようだった。会話の内容はよく聞こえなかいけれど、見ていてあまり気分のいい状況ではない。私は、最初見てみぬ振りをしようかと考えたけれど、それはその子供が殴られるまでのこと。

気付けば、一人に殴りかかっていた。冷静になれば、無茶だとしか思えない行動。相手が怒り、子供が逃げ出してから、一気に頭が冷え始めた。

「テメェ……いきなり何しやがんだ！　お前もあのガキの仲間か？」
「仲間？」
「あいつは、この辺じゃ有名なスリの常習犯なんだよ」
なんだって？！　……私はむしろ、あんたたちがカツアゲでもしてるのかと思ってたよ。

どうやら話を聞いていると、財布をすられて取り返している真っ最中だったらしい。子供を逃がしたのは不味かったか、とは思うが助けたことを後悔する気持ちは湧いてこなかった。それは、男がナイフを取り出し始めたからだ。これを向けられていたのは、私ではなくあの子だったかもしれない。
「なんだよ？　まさか、知らねェのに助けたわけ」
「ココで他人を助ける奴なんかいるわけねぇだろ馬鹿！」
「やっぱりあいつの仲間だろ」
数えれば男たちは、全部で四人。人数も問題だが、こちらは武器がない。絶対的に私が不利だ。最初の一撃は背後からの不意打ちだった。だから、当たったしダメージも与えられたのだ。喧嘩なれした連中に、これ以上渡り合えるとは思えない。
ゆっくりとこちらに近づいてくる男たちから、少しでも離れるように後退する。いきなり走って逃げれるほど、足が動きそうになかった。情けないけれど、少し気を抜けば膝が震えそうになる。
「仲間ならさァ……あいつの代わりに責任取って貰わないとなァ」
「まぁ、ちょっと待ってって、こいつ結構可愛い顔してねぇ？」
「ぎゃはは……お前って、男が好きな上にこんなガキが好みだったのかよ。趣味わりぃー」
屈辱だ。恐怖に加えて、悔しさから震えそうだった。「可愛い」という発言はまぁ良しとしよう。しかし、勝手にスリの仲間だと決め付けた上に、私をガキ扱いして私が好みだと趣味が悪い、とは…

…失礼だ！　しかも、また男だと思われている。

私は、しばらく好き勝手なことを口々に言う男たちの話を黙って聞いていたが、ずっと聞いているわけにもいかない。というか、これ以上聞いていたくなかった。

「さっき……さっき殴ったのはこっちが悪かったから謝罪する。でも、俺はスリの仲間じゃない」

男であることを否定するのはやめておく。余計に話がややこしい方へ向かいそうだから。

「はは……謝罪するってよ、どうする？」

「バカじゃねぇの？　てか、お前正気かよ？

謝って済むなら、煉獄街で死ぬ人間が半分は減るぜ」

そう言って一人の男が私の顎を掴んできた。急なことだったので、避けられずに捕まってしまう。それは、私の顔が可愛いと言っていた男だった。顔を近づけられ、男の吐く息の臭いと男に対する嫌悪感から私は顔を歪めた。こちらからすれば、男たちの正気こそ疑うが、ここではこんな連中など珍しくもないのだろう。周囲の人々は、興味すら持たずに近くを通り過ぎていく。

「大人しくしてれば、命だけは助けてやってもいいぜ」

「嫌がってるぜ、そいつ。残念だったな、お前は好みじゃないってよ」

そういいながらも、止める気があるものなどいない。いくらバイトで忙しくて男女のことに疎い私でも、目の前の男が何を考えているのかぐらいは予想がつく。

男の無骨で汗ばんだ手が頬をなで、首筋を這う。吐き気がした。この手の状況には耐性がない私には、この辺りが限界だった。もう少し大人しくしていれば、相手を油断させることもできるかもしれないが、これ以上この男に付き合うなんて冗談じゃない。

今できる限りの精一杯の力を込めつつ、身体を引き足を振り上げる。とっさのことで反応が遅れた男の急所に見事に蹴りが決まった。

相手が悲鳴を上げたところで、迷わず最初に視界に入った路地へ走る。他の連中が状況を把握して、捕まえようとしてくるが、それも身軽な動きで交わす。先ほどまで動かないと思っていた足は、思いの外よく反応した。そう……追い詰められれば追い詰められるほど冷静になれる。冷静になれば、身体の緊張も解けて動く。自分の性格にこれほど感謝したことはない。こうして、その後数時間に及ぶ逃亡撃は始まった。

逃げている途中で、私を追う男の一人が地面にうずくまって唸りだすのを見て、私は足を止めた。物陰に隠れつつ、男を観察する。男から禍々しい光が溢れ出すと同時に周囲を包み込む濃厚な闇。目がくらみ、再び目を開くと男は熊のような獣に変化していた。男はライカンスロープだったのだ。

初めて見たライカンスロープが獣化する姿に呆然としていたが、はっと我に返り逃走を再開する。相手は、物音だけではなく私の匂いもたどってくる。先ほどよりも逃げることが困難になったことが分かる。そこで、隠れ場所をゴミ捨て場にしたのだ。

魔法技術が発達した世の中には、あらゆる物に魔力を宿す技術が存在し、降魔技師と呼ばれる人々がそれを行う。ライカンスロープは、魔力を宿された人間のことだ。彼らは魔力によって、獣に姿を変えることができる。そうすることで、特殊な能力を発揮したり、肉体や精神を強化することができるのだそうだ。魔法規制法でライカンスロープ化が禁止されたために、彼らの多くが煉獄街に住み着いたというのは本当だったらしい。

ポリバケツの影から出て、移動を再開する。これまでの経緯を思い出したことで、余計に疲れてしまった。何か役に立つことでも思いつけばそれも報われたかもしれないが、現状を打開する方法は浮かばない。

煉獄街になど入るべきではなかったのかもしれない。まだ入って半日と経たないけれど、ここから無事帰れる自信などなくなっていた。恐がっているつもりだった。それでも覚悟を決めたのだと思っていた。でも、それは違う。きっと煉獄街に行こうと思えたのは、好奇心や何の根拠もない自信があったからだ。そこには、本当の恐怖も、覚悟も存在していなかった。　……いや、ここに来たことを今更悔やんでも仕方がない。

このまま放置して家に帰る、という選択肢もある。しかし、もう私には住む部屋はない。家賃が払えず、なおかつ家具も押収されている。このまま帰っても碌なことはない。借金取りに追い回されるだけだ。これからの自分の生活と母の入院費をなんとかしなければいけないのだから、帰ろうとここで真実を突き止めようが、どちらにしろ苦労することは間違いない。それなら、一か八か伯父の遺産を当てにしてみるのもいいかな、と思う。

そして、真実が気になる。母の様子からして、何か裏があることは間違いない。遺産と真実。どちらかだけでも手に入れてから煉獄街を出よう。

生ゴミ臭い通路を抜け、込み合っている路地をあてもなく進む。走りはしない。敵はまだ遠いし、生ゴミの臭気のお陰で少しは追跡がし辛くなっているだろう。それに、走れば足音を拾われる危険性

が高まってしまう。
次に隠れる場所を求めて、立ち止まる。背後からしてきた微かな物音に気付き、動悸が激しくなる。まさか、もう追いつかれたのだろうか？　そう考え耳を済ませた瞬間、私は物陰に引きずり込まれていた。

第三話　再会

日が沈み煉獄街にも夜が近づく。
夕闇は、心にも侵食する。
指し伸ばされた手は、闇を照らす一筋の光。
闇に捉えられたばかりの者は、それが偽りの光ではないかと疑いなどしない。

一瞬心臓が止まりそうになった。羽交い絞めにされたまま後ろに引っ張って移動させられる。もう、ダメかもしれない……　ところが、予想に反して背後から聞こえてきたのは、私を追ってきていた男たちの声ではなかった。
「しっ……静かに。お前、　真央だろ？
なんでこんなトコで追いかけられてるのか知らないけど、あいつら撒くの協力してやるよ」
声変わりはしているが男にしては少し高めの声。相手はまだ私と同じぐらいの年齢の少年のようだ。そういえば、彼は先ほどの男たちより小柄だ。
「誰？」
「ああ……そうか。俺が誰か分かんないか？」
少年は、背後から羽交い絞めにしていた私を解放し、向かい合う。態度からしてどうも相手は私のことを知っているらしいが、こちらの記憶にこの顔はない。それ以前に、煉獄街に知人なんていないはずだ。
顔を見つめたまま動かない私を見た彼は、溜め息をついた。
「やっぱりな。
ここ暗いから……ちょっとこっち来い」

少年に腕を引かれて、すこし開けた場所に移動する。夕陽の光が、彼と私の色彩を浮かび上がらせていく。彼は、鮮やかなオレンジ色の髪と赤っぽい目をしていた。一度見たら忘れないだろう、鮮烈な色。

近年では、生まれてから遺伝子操作や薬で色を変えるなんてことは珍しくない。でも、きっと彼は違う。生まれながらにこの色を持っていると言っていた人物を私は一人だけ知っていた。記憶の深淵に沈みかけていた思い出が一気に浮上してくる。

あれは、まだ小学校に入学したばかりの頃だっただろうか。私は、よく一人の男の子と遊んでいた。オレンジ色の髪のその子は、数年後に引っ越していってしまい、とっても悲しかったのを覚えている。そう。彼の名前は、……　驚いた顔をした私を見て、彼は愉快そうに口の端を上げる。

「ぇえー！？

……ひじり？　もしかしなくても、聖？」

少年はそれを肯定して頷く。彼は、私の幼馴染の聖だったのだ。成長してしまっていて特徴的な色がなければ、きっと分からなかっただろう。

「酷いじゃないか？　俺なんか一目見て　真央だって分かったってのに……

まぁ、　真央はあんまり変わってなかったからな」

「それちょっと酷くないか？　まぁ、いいけどさ。

なんか懐かしいな。

でもなんで聖がこんなところに？」

「今はそんなことより、移動した方がいいと思うけど？」

さり気なく話を逸らされた気がしたが、言っていることはもっともなことだったので、聖について移動する。彼に対する警戒心は完全に消え去っていた。

付いた先は、微かに生活観が漂うビルの一室だった。聖が普段生活しているところなのだろう。荒れている煉獄街では、比較的綺麗な場所だ。ボロさのレベルで言えば、私の家とそう変わらないかもしれない。元は何か小さな会社のオフィスだったのか、同じタイプのデスクや椅子が数個部屋の隅に並んでいた。エネルギーも供給されているらしく、灯りも付くし、なんと暖房も使えるらしい。しかも、私の勘違いでなければだが、驚いたことにそれらは魔法製品のように見える。

「好きなところに座れよ。

で、なんで　真央が煉獄街にいるんだ？」

私は、一番近くにあった椅子に座り、遺産相続の話を聞いてから今にいたるまでのことを話し始めた。何も全部言う必要はなかったかもしれない。だけど、疲れていた私は全てを誰かに吐き出してしまいたい気分だった。

所々頷いたり質問してきたりしながら話を聞いていた聖は、その後しばらく沈黙していた。

少し気まずい空気を振り払おうと、私はさきほど気になったことを質問してみた。魔法製品のことだ。なぜそんなものがあって使えるのか、それは本当に気になっていた。

「ああ、そんなことか」と、聖はその質問にすんなりとんでもない答えをくれた。どうも、煉獄街には大量の魔力を供給している場所が存在するらしい。そして、そこから漏れ出している魔力を、一部の人は聖のようにこっそりくすねているんだそうだ。そんなことして大丈夫なのか？と思ったが、聖によれば……

「余っていて勿体無いから、使ってんだよ。誰も困らないんだし、

いいだろ」とのこと。確かに……。でも、聖……それは犯罪だ。
魔力が使い放題。そう考えるとここは、私の家よりも過ごし易い空間なのではないか、と思った。
「じゃあ、魔法製品の方は？」
「あれは、捨てられてたヤツを俺が拾ってきて修理したんだ」
なるほど、そちらもお金は掛かっていないわけだ。（貧乏な私にはここは重要）聖は昔から電化製品や玩具を直すことが得意だった。そんな彼だったから、今では魔法製品も直せると言われても納得できる。

「それより、お前これからどうするんだ？　まだ、この街にいるつもりなんじゃないだろうな」
聖としては私が帰ると答えることを望んでいるんだろう。だけど、私はまだ煉獄街を出て行く気はなかった。遺産を相続したいというのもあるし、何より真実を知りたいのだ、と私は素直に聖に述べる。ここで嘘を付いても良いことはない。特に計算したわけではないけれど、もしかすると聖が協力してくれるのではないか、という期待もあった。
今、目の前の聖は私の話を聞きながらパソコンに地図のデータを入力している。その地図は私が持っていたものだ。その行為が、私の期待を煽る。
そんな聖の手が止まり、彼は顔をしかめた。その反応が気になり、私はモニタを覗き込みつつ聖の次の発言を待つ。聖が沈黙を破るまでにそう時間は掛からなかった。
「さっき　真央の持ってた地図と煉獄街の地図を照合してみたけど……
その目的地には行かない方がいいと思う」
？　どういうことだろう？

「ここ煉獄街は無法地帯みたいなもんだけど、決まり事はあるし立ち入り禁止区域もいくつかある。そこにはどんな強い奴も凶悪な奴も近付かない。
理由は用がないっていうのも大きいだろうけど、それだけじゃない。そんなところに立ち入ったのがばれたら”プルガトリオ”の連中に目を付けられるからさ」
地図上で赤く点滅している場所がある。おそらくそこが立ち入り禁止区域なのだろう。目的地のことはとても気になったけれど、それよりもまず私は、新に出てきた単語に反応した。
「プルガトリオって何？」
そんな私の質問を受けた聖は、呆れたような表情になって説明を始める。

聖によると、プルガトリオは煉獄街を支配している組織らしい。彼等が過去にやってきたことなど詳細は聞かせてもらえなかったが、この煉獄街に住む者たちがおびえる存在だと教えられれば、関わりたくないような連中であることぐらい分かる。

「で、そのプル……なんとかって組織が立ち入り禁止区域っていうのを管理してるんだ？」
「プルガトリオだ。
それでも行くか？」
私には、独裁者なんてものは歴史上か御伽噺中の存在に思えてしまう。煉獄街で生活していたらしい聖と私では、プルガトリオに対する認識は大分違うだろう。これで彼の助けをかりるという望みは絶たれたと思った。

しばらく考え、私は答えを出す。行けなくてもいいが、真実を調べてみるぐらいはしたいのだと。
「……情報収集ぐらいなら手伝ってやるよ」
「いいの？」
「真央ってこうと決めたら何言っても聞かないからな」
そういえば、一緒に遊んでいた頃も、私は聖を振り回して困らせていたような気もする……

これからのことを相談し、いくつかのことを決めた。一つは、私は男の振りをして過ごすこと。ここ煉獄街では、性別を気にしない人たちも多いが、やはり女である方が襲われる可能性が上がるためだった。
真央なら問題ないよな、と真顔で言う聖には一瞬殺意すら覚えたが、事実なのでそう言われるのも仕方ない。
「……ここでもこの顔が役に立つわけか……」
「どうしたんだ？　男の振りすんのが、そんなに嫌なのか？」
私は、普段からよく男の子に間違われることや、友人に美少年顔と言われたことを話した。要するに私は、この顔にコンプレックスを持っているわけだ。
「……ま、役に立つならそれでいいだろ。ここでは、使えるもんはなんでも使わないと生き残れないからな」
フォローになっているのかなっていないのか微妙なその言葉は、軽く言っている割には重い意味を含んでいる気もした。そういえば、私は聖がここにいる理由を聞きそびれたままだ。だけど、今尋ねても彼は答えをはぐらかすだろう。そんな気がする。私は、この疑問を胸の奥にしまっておくことにした。懐かしい幼馴染との再会の喜びを壊したくはないから。

「へぇ……思ってたよりも色々なモノが売られてるんだな……」
道の両端に広げられている品物を見渡しながら呟いた。食料品、衣類、日用雑貨……そして私の家には殆どなかった電化製品や魔法製品まで売られている。日の光の下で新品同様の品が並んでいる店などを見ていると、ここが煉獄街であることを忘れてしまいそうになる。逃亡中に走っていた道と違いここは幅が広く、影になっている部分も少ない。この辺りは比較的安全で店を開く人が多い地区なのだと聖が言っていた。
聖と私は一時的に別行動を取っている。起きて早々「まずは武器を調達する」という聖の提案に従い、私は自分が使う武器を探すためにここに来た。正直、武器なんて持ちたくなかったけれど、昨日の逃亡劇を思い出すと持っていた方が良い気もする。使いどころを間違えると相手を興奮させてしまうこともあるから、逃げ場がない時の最後の手段、と考えて武器を携帯することに同意した。

「一人で行動するのは危険だよ」
不安からだろうか、私に対して言われた言葉だとは限らないのに動揺してしまう。しかも、この声を私は聞いたことがなかっただろうか？
声のした方にゆっくりと視線を向ける。そこには煉獄街ではそう珍しくない薄汚れた服を着た少年が立っていた。十歳にも満たないような幼い子供。それだけなら私は少年に気付かなかったかもしれない。しかし、奇妙なことにその子は狐の面をしていた。
「君は」
昨日煉獄街の入り口で見かけた少年では、と思うが、上手く言葉にできない。少年はしばらくこちらを見ていたけれど、私が声を発した後に人ごみにまぎれてしまった。　なんだか気になってとっさ

に後を追う。

通りの端の辺りまで来ても少年を見つけることはできなかった。なぜそんなにもあの子供が気になるのか？　そんなことを考えながら歩いていると、肩に軽い衝撃を感じた。

「っと、気をつけなよ」

「ごめん」

謝りながら前を見ると、派手なピンクの髪に真っ白なメッシュの入った頭があった。顔を見てみると、そんな髪の色が違和感なく似合う可愛い顔をしている。私と同じ歳ぐらいか下ぐらいの少年だ。つい顔を凝視してしまって恥ずかしくなったけれど、気付けば少年の方もこちらの顔をじっと見ていた。

「いや、気にしないでいいよ。……君、見ない顔だね。一人で出歩いてると危ないよ」

さっきの少年といい……なぜ皆そんなに注意してくるんだろう。……私はそんなに危なっかしく見えるのだろうか？　もしかしなくても煉獄街慣れしていないっていうのが丸分かりなのかもしれない。これは、ちょっと気を付けなくては。

「ちょっと買い物に来ただけだし……友達と待ち合わせしてるから」

そういえば、ピンク頭のこの少年も聖も単独行動をしている。彼らは実は強かったりする……のかもしれないな。ここで生活できてるぐらいなんだし。

「そうなの。ねぇ、名前教えてくれない？　僕はカイナって言うんだ」

「……　真央」

「　マオってさぁ……綺麗な顔してるよね！　僕好みだよ」

名前ぐらいなら教えてもいいかと思って答えたけれど、間違いだ

ったのかもしれない。急に馴れ馴れしい態度になった気がする。しかも、なんだか嫌な話の流れになって来てないか？　綺麗な顔なんてそう言ってもらえる褒め言葉じゃないから嬉しいけれどさ。今、私って男と女どっちだと思われているんだろう。あまり考えたくないような気もする……

「えっとさ、カイナも何か売ってるの？」

とにかく話をそらそう。

「クスリだよ。

どう？何か買っていかない？

一般的なヤツから、ライカンスロープ用まで揃ってるけど」

「ライカンスロープ用？」

薬にライカンスロープ専用のものがあるとは知らなかった。

少し興味が湧いてきたところで、聖が通りの反対側から走ってくるのが見えた。片手には小型のノートパソコンを持っている。昨日は携帯していなかったけれど、普段は持ち歩いているんだそうだ。もしかすると、聖がこの街でやっている仕事とかにも関係するのかもしれない。

「っ！？　おい、　真央何やってんだ。そいつが何やってる奴か知ってんのか！？」

「え……薬屋さんでしょ？」

いきなり怒鳴られて訳が分からない。私は怒られなければいけないことをした覚えなどないのだから。

「ああ。ただし、非合法のな。カイナ……こいつ新入りで金なんて持ってないぜ。他あたってくんない？」

非合法の薬……覚せい剤や麻薬の類だろうか。私の住んでいた街でも多少は出回っているのだから、そりゃあこの街なら出回っていて当然だろう。まさか、白昼堂々と売り歩いているものだとは思わ

なかったが。もちろん、私はそんなものに手を出したこともないし、これからも手を出すつもりはない。
「ふーん、じゃあもしかしてクスリやったことないの？　なんなら、一回目はサービスしてあげてもいいよ！」
「だから、いらねぇって……」
カイナは、何も言わない私の目を上目遣いに見つめつつ、まだ薬を売りつけようとしてくる。聖はそんなカイナを本気で鬱陶しそうに追い払おうとするが、それが彼の機嫌を損ねたらしい。
「僕は　マオに聞いてんだよ！
聖は、　マオのただの”友達”なんだろ？
商売の邪魔しないでよね」
先ほどまでの可愛らしい態度と打って変わったカイナは昨日の男たちよりも物騒な気配すらする。今の彼を見ていると、煉獄街の住人なのだと納得できる。声は怒気を孕んでいるのに、聖を見るその目は冷たい。凍てつきそうな視線。

「あっ、そういう薬はいらないです」
「ふーん、残念だな。でもさ……　マオって弱っそう。
力が欲しくない？　僕はさぁ……そういう薬も扱ってるんだ。
君だったら、特別なの用意してあげてもいいんだよ？」
薬はいらないと断る私に、カイナは聖に対してとは打って変わって、愛想のいい笑顔を向けた。酷いことを言われている気もするが、私は今のところ彼に気に入られているらしい。ただ単にいい鴨だと思われている可能性も高いけど……　当然、先ほどよりもよりあやしい誘いははっきりと断る。
カイナはそんな私の態度に少し残念そうな表情を浮かべた。そして……
「そっか。それなら今日のところはいいや。でも、僕諦めないからね」

走り去る間際に近づくカイナの顔がぼやけて見えた。かすかに香る甘い香り。
「あいつ、　真央になんてことを！？」
「……なぁ聖？　もしかして、私……キスされた？」
横で聖がカイナを罵る言葉を聞きながら、私は呟いた。なんとなく何をされたのかは分かるけれど、なぜそんなことになったのか今一分からない。冷静になってみれば、あれは私のファーストキスというやつではなかっただろうか？　……いやいや、ここで怒っても、してしまったものは仕方がない。相手が美少年だったから、役得だと思うことにしよう。なんとなく変な方へ思考が向かっていた私は、聖の本日二度目の怒鳴り声で正気に戻った。
「お前鈍すぎ！　あれぐらい避けろよな！」
キスをされたのは私なのになぜか冷静な私とは反対に、いつも冷静な聖がこれまたなぜかすごく動揺して嫌そうな顔をしている。
「なんで聖がそんなに怒ってるの？」

第四話　カラス

彼らは啼く。その鳴声は、新たな獲物を見つけた喜びの声。
彼らは漆黒の翼を血に濡らし、肉を喰らう。
この地で彼らが飢えることはない。
そう、ここは煉獄街。
街に巣食う狂気は血と死に飢えている。
今日もまた、狂気が齎した多くの死が彼らの糧となる。

昨日のカイナとの一件で気まずい夜を迎えた私は、気分転換のために煉獄街を散策していた。聖がどこかに出かけてしまい暇だったからだが、知られればまた聖に怒られるかもしれない。すぐに戻れるように散策は、聖の隠れ家の付近だけにしておく。
私は、周囲に漂っている異臭に気付き足を止めた。ふと、カラスの鳴き声がする方に目を向ければ、黒い塊のようなものが見える。カラスたちの影になっていてよく見えないそれを最初はただの生ゴミだと思った。歩を止め凝視していた私に、彼らは視線を向け威嚇の声を上げる。いくら空腹だからといって、お前たちのご飯を横取りするつもりはない、という意思表示にその場を去ろうとしたその時……私は、彼らが食べていた何かと目があった。そう彼らの朝食には目があった。それは間違いなく人の形をしていた。
「ひっ……」
気持ちが悪くなって後退る。すると背中が何かにぶつかってよろけてしまった。一体何が？
「おや？　お前さんは一昨日の……」
後ろを振り返ると、見覚えのある顔があった。一昨日、煉獄街の入り口で話しかけてきたおじさん……玄九朗さんだ。
「あ、ごめんなさい」

「……無事だったんだな。どうした坊主？　お前さん顔色が悪いぞ。もしかして、あいつらにでも苛められたのか？」
玄九朗さんは、そう言ってカラスたちの方を見た。カラスたちは彼の言葉が分かるかのように、鳴き始める。私には、文句を言っているように聞こえた。そして、玄九朗さんも彼らが何を言っているか分かったかのように話を続ける。
「ああ、なんだ死体を見て気分が悪くなってたのか。あんなのこの辺じゃ珍しくないぞ。良かったな、カリオンが丁度少ない時期で」
「カリオンって本当に煉獄街にはいるんですか？」
驚いたように、尋ねる私に玄九朗さんはウンザリしたような表情になる。
「それはもう……どっさり、といる時はいるぞ。蝿や蛆が集った死体の大群が押し寄せてくる様は、俺でも見ててぞっとする……坊主……気の毒だが、噂をすればってやつらしい」
「えっ」
玄九朗さんの言葉に私は慌てる。それはまさか、まさかカリオンが近くにいるということだろうか？

奴らは、玄九朗さんがじっと見詰めていた先にある路地から、集団でやってきた。吐き気がするほどの強烈な腐臭を漂わせ、本来なら動くはずのない腐りかけの身体を引きずる様に前進してくる。
”カリオン”
それは腐った死体を意味するが、ここ最近ではカリオンと言えば人に襲い掛かる腐った死体のことを指すこと多い。彼らは死んでいるのに自ら動き、生き物を襲い喰らうという。その実態は魔力が抜け切っていないライカンスロープの死体。魔力が抜け切れば、ただの死体になり動かなくなってしまうのそうだ。今まで実際にそんなものを見たことがない私の中では、カリオンなんて都市伝説の一種ぐらいとしか認識していなかった。まさか実物を目にする日が来る

とは夢にも思わなかったけれど、想像以上だ。見た目と臭いがもたらす吐き気で、頭が朦朧としてくる。

「おいおい……坊主、しっかりしろよ。じゃないと、こいつらに喰われちまうぞ」

玄九朗さんの声と同時に高い悲鳴が上がった。もう少しで遠のきそうだった思考が現実に戻る。悲鳴を上げたのはカリオンだった。私から五歩ほど離れた場所で、一体のカリオンが体を肩から腰にかけて斜めに切り裂かれて呻いている。化け物そのものなのに、元人だったことが分かる形をしたカリオンたちに私は嫌悪感を抱きつつ周囲を見回した。玄九朗さんの姿を探せば、彼は近くで戦闘中だった。彼の周囲では、次々とカリオンの残骸が積み上げられていく。いつの間にか玄九朗さんの手には一振りの日本刀が握られている。数体のカリオンが同時に切り刻まれ吹き飛ぶ様は、まるで魔法みたいだ。

「……すごい」

「あの日本刀どこから出てきたんだろう？」

目の前の惨劇に、一時的に慌てたがまたも私は落ち着きを取り戻していた。

「……そっちか……　魔法の籠められた武器の中には、こいつみたいに収納に優れたもんもあるのさ」

玄九朗さんは、間近で見た戦闘に私が反応していると思ったのかもしれない。もちろん、それも壮絶な光景だった。もうホラー映画を見てもつまらないんじゃないかというようなグロさだ。正直恐い。ただ、カリオンたちと玄九朗さんが戦う姿は、どこか現実味がなかった。綺麗で、かっこいい……そうアクション映画を見ているみたいな感覚。だからこそ、どこからともなく現れた日本刀の方に目が

行ったのかもしれない。そんなことを気にしている場合ではないのに。普通の日本刀との区別は私にはつかない。しかし、よく見ていると刀身が微かに紫色に光っているような気もした。

玄九朗さんが戦っている間私は何をしていたかというと……ひたすら逃げ回っていた。いや一応武器としてナイフは持っていたけれど、アレとは近距離でまともにやりあえる自信がなかったのである。目の前に半分ぐらい頭蓋骨が見えている顔が現れた時は、慌てて蹴り倒したが、あの感触はしばらく忘れられそうにない。靴の裏に腐った肉や血、臭気が付くとかそういう問題じゃない。（もちろんそれも嫌だが）蹴った瞬間ずるりと足がすべって、カリオンの残った肉が骨から剥がれ落ちる。あの気色悪さといったら……　ああ、もうこのことを考えるのはやめよう。どうせ、今夜は夢の中までカリオンが訪問してくるだろうから。私は、再び逃げることに集中した。

カリオンが殆どただの死体に戻った頃、玄九朗さんは私を傍に呼んだ。

「坊主、ちょっとこっちに来い。

……傀儡師いるんだろう？　ライカンスロープじゃない奴まで巻き込むこたぁないだろうが」

「くぐつし？」

くぐつし……？　私にはそれがどんな存在を指すのが分からない。

玄九朗さんが睨みつけている方を見ると、一人の女の人が姿を現した。病的なほど青白い肌をしたその人は、不満そうにこちらを見つめている。

「……か、か、関係ない……わ。……ライカンスロープと、い、い……一緒にいるなら……私の敵だもの」

小さい声。詰まりながら発せられる言葉。聞き取り難いそれらか

らは、微かに怒りが感じられる。彼女がどういった人物なのかは不明だが、玄九朗さんとは知り合いのようだ。それにしても、ライカンスロープと一緒にいるというのはどういう……　玄九朗さんがライカンスロープだということなのだろうか？
「おいおい、禁忌とされてるカリオンを生み出した上に、無差別攻撃は拙いんじゃねぇか？
魔法省の魔導師にばれたら、お前さんの身が危ないだろうに」
「ば……ばれなければ、問題ない……のよ」
　彼女が叫ぶと同時にまたどこからともなくカリオンたちが姿を現した。
「！？　ちょっと待って。このカリオンを彼女が？」
「ああ。奴は通称傀儡師。魔狩人でな。……得意なのは、傀儡、つまり人形を操ること。
そして、今回みたいに死体に魔力を吹き込んでカリオンに仕立て上げ、操ることもある」
　玄九朗さんは、カリオンを切り伏せながらでも、私の質問にちゃんと答えてくれる。慣れているのだろう。彼には、まだ余力がある。

　私は、近づいてくるカリオンを近くに落ちていた棒切れで殴り倒しながら玄九朗さんに質問を続けた。少しは彼らに慣れてきたお陰で、攻撃することに対する戸惑いは薄れている。それに、この方法だと蹴ったりするほど、不快な感触も伝わってこない。
「カリオンが禁忌だっていうのは？」
「カリオンは、降魔技術を会得した奴なら誰でも作れる。
だが、あんな連中を増やしたってはた迷惑なだけだろう？　だから、魔法省はカリオンを意図的に作ることは禁止している」
　確かに、動く死体なんか増えても百害あって一利なしだろう。納得しつつ、私は攻撃を続けた。とは言っても、私の打撃なんて彼らはものともしていないように見える。悲鳴を上げることはあっても、

痛みは感じていないのかもしれない。結局、全てのカリオンを片付けたのは玄九朗さんだった。

動いている最後の死体を真っ二つに切り捨て足蹴にし、玄九朗さんは傀儡師に顔を向けた。

「もう死体の在庫は切れたみたいだな。お前さん自慢の人形たちはどうした？」

「っ！！　……き……今日は、っこ……これで失礼するわ」

「……はぁ。本当に懲りないお嬢ちゃんだ」

悪役の王道的捨て台詞を残して姿を消した傀儡師のいた場所を見ながら玄九朗さんは苦笑をもらした。その顔には、本当の嫌悪や怒りの感情は浮かんでいない。命を狙ってきた相手に対して、そんな態度を取るなんて変な人だ。

「放って置いていいんですか？」

「深追いする必要はないさ。魔狩人は、ライカンスロープにとっちゃあ天敵だが、あいつらが減ったら減ったで面倒事も増える。暴走したライカンスロープを掃除するのが、奴さんたちの主な仕事だからな」

魔法省と魔狩人の仕事内容なら一応私でも知っている。

魔法省は魔法規正法ができると同時にできた新しい省で、そこで働く人たちは魔導師と呼ばれる。文字通り、魔法に関する物事を導くのが彼らの仕事だ。魔法規正法の違反者を取り締まり裁くことすら魔法省の中で行われる。とは言っても、魔導師たちだけでどうにかできるほど、違反者は少なくない。だから、違反者一人一人には賞金が掛かっている。賞金目当てに違反者狩りをする人々。彼らを魔狩人と呼ぶ。魔法に関係する犯罪者たちを捕らえることは危険なので、魔狩人は優秀な戦闘能力が必要になる。傀儡師の場合は、本

人に戦闘力はなさそうだが、カリオンや人形を操るという特殊な能力があった。もっとも、カリオン生成は違法行為らしいから、あんな人に魔導師はお金を払っているのか……と思うと嫌な気分だ。賞金は元々税金なわけだしね。それでも、人数はそんなにいないのだから、いなくなったら困るのだろう。

「そういえば……玄九朗さんは、ライカンスロープなんですか？」
「……一応な」
私はそれ以上突っ込んで聞くのはひかえることにした。表情は相変わらず飄々としていて、何を考えているのか分からない。ただ、玄九朗さんの声が少しだけ沈んでいる気がした。

ところで気になっていた日本刀は、残念なことに、どこに仕舞われたかはよく分からなかった。そちらも、聞いたらはぐらかされそうだったので、違う話題を探す。
「あの、もしかして……喧嘩というか、戦うことが好きだったりします？」
「戦うことが嫌いなライカンスロープはいない。本能から闘争を楽しみ、破壊と殺戮に陶酔し、血と魔力を求める。
……あれは、そういう生き物だからな。
ただ、俺はまぁそこまで戦闘が好きってわけじゃない。そういう意味でも半端者なのさ」
先ほどのどこか楽しそうに戦う姿を思い出して尋ねたのだけど、この質問もちょっと問題だったみたいだ。半端者のライカンスロープ。それがどういうことが分からないけれど、私にとってはそれが良いことであったように思う。今こうして、穏やかに会話していることが出来るのは、そのためかもしれないから。私は、昨日私を追ってきたライカンスロープの男のことを思い出していた。玄九朗さ

んの言うことが事実なら、ライカンスロープは、アレで普通だということなのだろう。

死体を見て気分が悪くなった上に、カリオンと魔狩人に遭遇した私に玄九朗さんは、私に同情的な目を向けてくる。ここでは、カリオンや魔狩人に遭遇することなど珍しくないだろうに……　昨日も思ったけれど、本当に良い人なのだろうか？　少し警戒しながらも、私はすでに玄九朗さんに興味を持っていた。

彼もこちらに興味があったのか、煉獄街に来てからのことを尋ね、私は今朝までの出来事を大雑把に話して聞かせた。代わりに玄九朗さんは、この街の日常について話してくれる。どうも玄九朗さんはカラスたちと仲が良いらしい。私がカラスに威嚇されたことを告げると、笑って彼は言った。

「お前さんこいつらが敵意を持っていると思ってたのか？　あれは、威嚇していたわけじゃない。

坊主も一緒に食わないか誘っていたんだよ」

「うっ……絶対無理ですよ」

どこまで冗談なのかは分からないが、いくら飢えたとしても人間の死体は食べたくないと思う。というか、カラスに私は同情されたということだろうか？　カラスに失礼かもしれないけれど、ちょっとそれは人間としてどうだろう……自分が心配になってくる。

「しかし、珍しいこともあるもんだな。こいつらが、近づいてきた人間を襲わないなんてな。

最初に、いじめられたのか？って聞いただろ？　坊主は苛め甲斐がありそうだから、てっきりそうだと思ったんだが」

……彼は、私を一体どんな奴だと思ってるんだろう……気に入られているみたいだけど複雑……。

玄九朗さんによると、煉獄街のカラスは生きている人間も食料にしているぐらい凶暴で、食事中なども近づくのは危険なんだって。

私ってそんなに危険な状況だったのか。

三十分以上話した頃、警戒が解けてきた私は、ぽつぽつと煉獄街に来た事情を話しはじめた。玄九朗さんも、聖と同様に帰った方がいいと言って来たが、なぜか途中からそう言わなくなり、妙に興味を示し始めた。不思議に思ったけれど、妙な話だから興味を持たれても仕方がないかもしれない。

だけど、最後まで話を聞き終えた玄九朗さんが協力を申し出てきた時はさすがに驚いた。私はお礼も上げられないし、遺産相続の話自体嘘かも知れないと分かっているのに、何故？　素直にそう聞く私に、玄九朗さんは笑いながら「不謹慎かもしれないけど、面白そうだからな」とだけ答えた。

「坊主が言ってたオレンジ頭の幼馴染ってのは、お嬢ちゃんのことだったのか？」

聖の隠れ家に連れ帰った玄九朗さんは、部屋に入るなり、そう呟いた。

「お嬢ちゃん？」

「最初に会った時に女の子かと思ったんで、その頃の名残で……な」

なるほど、確かに聖は可愛い。悲しいことに、私よりも可愛いかもしれない。話題に上がっている張本人は、私への文句を言いながら近づいてきて、私の隣の玄九朗さんを発見し、こちらをにらんで固まっている。やばいなぁ。これは、疑いようもないぐらい怒っている。もちろん、お嬢ちゃんなどと呼ばれたからもあるだろうが、それよりも私の行動に対してだ。

「真央……俺さ、お前にここで他人を信用するな、むやみに遺産相続の話をするな、って注意したよな？

しかも、知らない人を連れてここに戻ってくるとはどういうことなんだ?!」
「まぁまぁ、お前さんとは知らぬ仲でもないだろう。　お嬢ちゃん?」
「あんたのことは知ってるけど、住居に連れ込むほど親しくない。大体……俺は、あんたのことは以前から胡散臭いと思ってたしな」
事情を話した後は、私が口を挟む間すらなかった。二人の腹の探りあいというか、貶しあいというか……周囲には、今すぐこの場から去りたいような空気が流れている。傀儡師とカリオン相手の戦闘を先ほど目の当たりにしたばかりの私には、この光景すら平和に見えるけど……。

三十分ぐらい経った頃だろうか。煉獄街の現状などの話題も出てきて、私にはよく分からなかったので、無責任だとは思ったけれど、二人の話は殆ど聞いていなかった。それに、空腹に襲われていたため、あまり会話に集中できなかったのだ。一時的だけど、聖は玄九朗さんを協力者として認めることにしたようで、聖は言葉巧みに丸め込まれたらしく、不機嫌そうだ。
「今度、お嬢ちゃんって呼んだら、この部屋から追い出すだけじゃ済まない」
「ああ、悪かったな。お嬢ちゃん」
「真央……こいつのことは放って置いて、明日からの計画を立てよう。
あ、その前に食事にしようか?」
「えっ?　うん!　そうしよう」
この通り、仲良くなるのは先のようだけどね。でも、今後のことや、二人の仲について悩むなら、食事をしてからでもいいんじゃないかなぁ、と思う。

玄九朗さんが仲間になったことで、私は少しでも真実に近づけたのだろうか？

第五話　蜘蛛の糸

変じた姿が表すは、内なる狂気。
しかし、眠れる闇に抱かれてまどろむ者は気付かない。
己と共にある闇以上に暗きモノなど、彼の白き闇以外にはいないから。
新に出会うは、醜き蜘蛛に姿を転じる美しい人。
そのイトが導く先にあるのは、真実の光か、それとも甘美なる狂気か。

複数の人間の話し声で、私の意識は浮上する。頭は重く、上手く思考が働かない。自分の存在を確かめるように、手を上げて目の前に持ってくる。体の動きは遅い。けれど、腕を上げるのにさほど力は必要なかった。なぜなら、私の体は何かの溶液の中に浮かんでいたからだ。ガラス製の壁の向こうに、人影がぼんやり見える。私は、自分がホルマリン漬けの中の標本になったような気がして、少し不愉快な気分になった。
よく目を凝らしてみれば、白衣の人々が室内を出入りしている。知り合いの顔なんてない、と思うのに、どうしてか見慣れている光景な気がするから不思議だ。

ガラス越しに見える景色はどこか懐かしくて……とても冷たい。少しずつ覚醒する意識の中、先ほど感じた嫌な気持ちは溶けるように消えていた。
ぼうっとしながら室内を眺めていると、眼鏡をかけた男の人と目があった気がした。彼は、優しい表情で微笑む。彼の長めの髪がかすかに揺れた。私も微笑み返したくなる。しかし、微笑みは、私に

向けられたものではなかったらしい。彼が見ていたのは、他の人だった。皆と同じ白衣をかけた女性。寒い印象を受けるこの室内で、そこだけ陽だまりのような空気が漂っている気がした。私は、同じ部屋にいながら、彼らとは隔たった存在だった。

そう……でも、これは過ぎ去った過去。あの女性は……

覚えのない記憶に戸惑う。何があったのはかは知らない。けれど、この室内にいる人たちの殆どがもうこの世にいないのだ、と分かっている自分がいた。

近く、遠く、聞こえてくる獣の遠吠えの回数が減り、夜明けが訪れる。どこかで鶏の鳴き声がしたことで、私は目覚めた。寝ぼけた頭で、鶏のライカンスロープなんてものもいるんだろうか、という疑問が湧いた。いたら……鶏には悪いけれど、なんだか間抜けな気がする。いや、意外に強かったりするかもしれない。鶏はなかなか凶暴な生き物だ。変な夢を見たような気もしたけれど、どうでもいい鶏のライカンスロープのことを考えているうちに殆ど忘れてしまった。

今日は、聖や玄九朗さんと近くの酒場で情報収集をする予定だった。朝早くから部屋へやってきた玄九朗さんに、聖は露骨に嫌そうな顔を向ける。それでも、特に揉めることなく目的地へたどり着いたことに安堵した。

店の名前は“アリキーノ”。“誘う者”という意味のその名は、

地獄の鬼の名前が由来らしい。アリキーノは、この煉獄街では有名なお店ののようで、店内は早朝だというのにお客で溢れていた。

カウンターへ近いて行くと、周囲から視線が突き刺さる。最初のうちは新入りである私に対する好奇の視線かと思っていたけれど、どうもそれだけではないらしい。数名は、聖や玄九朗さんに声をかけてきた。愛想よく返事を返す玄九朗さんと違い、聖は面倒くさそうに話を聞き流している感じだ。

「聖ってこの街に知り合い多いの？」

「そうでもない。一方的にこっちを知ってる奴は多いみたいだけどな」

聖はそう言って、玄九朗さんのほうを少し睨んだ。

「最初のうちはよく色んなのに目を付けられてたし……」

「オレンジ色の髪で可愛い顔してるし、目立つのは仕方ないだろうな。坊主もそう思うだろう？」

自分のことを快く思っていないことを隠そうともしない聖の態度を、玄九朗さんは面白がっているようで……すぐに聖を挑発するようなことを言う。聖は、可愛いといわれるのが嫌いだ。

「うん。特にその髪が」

私自身、彼の髪の色のおかげで幼馴染だと分かったわけだから、髪の色が目立つというのは否定のしようがない。そして、……聖は煉獄街では場違いなことに、学らんを着用している。もっとも、制服がある学校の方が珍しいこの時代に着ているのだから、この街でなくても目立っていると思う。服装については、再会した日、私はなぜ聖が制服を着ているのか疑問に思って理由を尋ねた。理由は簡単で、他に着る服がなかった時になんとなく着てからそのまま、とのことだった。まぁ、その辺は私にも共通する部分がある。私自身もあまり服を持っていないからだ。事情は知らないけれど、聖もこの街にいるぐらいだから、そんなに服を持っていなくても不思議じ

ゃない。煉獄街にいると服装にはそう気を使う必要性を感じないので、それは私も助かっていた。普通の女の子なら着替えがないことに加えて、風呂やシャワーを使えないのが気になるところだろうけれど、私はそれもあまり気にならない方だ。贅沢は言うなよ、と最初に忠告してきた聖にも呆れられるほど私はここの暮らしに順応している。

カウンター内では、店のマスターらしき人が笑顔で私たちを迎えてくれた。彼の顔は少し恐くて、堅気でない雰囲気を持っているけれど、あまり気にならない。それを言うなら、店内の人間の殆どが……いや、この街の人間の多くが犯罪に手を染めた人間だからだ。数日前なら近づくのも嫌な見るからに物騒な空気を持った人たちの側を通るのも慣れた。というか、何事にも順応するか慣れなければ、正気を失うしか生きる道はないような街だ。暗闇を拒絶する者に、この街は容赦なく牙を向く。だけど、受け入れてしまえばそう居心地は悪くないかもしれない。偶然会った人間が聖や玄九朗さんみたいな良い人だったからこそ、そう思えるんだろうけれど……この街は少なくとも私を拒絶していなかった。今、ここにいられることがそれを証明しているように感じる。

近くで見るとマスターは強面ながら、なかなかかっこよい。日本人とは違う堀の深い顔。ダークブラウンの髪にアイスブルーの瞳。客が注文をする際に呼んでいるので、本名かどうかは知らないが呼び名は“マーク”。玄九朗さんと同世代かそれより上に見える彼の口から漏れる声は、低音で渋くてなかなか素敵だ。だけど……

「あらぁ、その子見ない顔ねぇ」

マスターは、見た目はともかく……言葉使いが女性的な人だった。

私はマークさんに訳ありで煉獄街に来た聖の友人として紹介され、なぜか気に入られたようだった。今日だけは、飲み物をただでサービスしてくれるらしい。朝からお酒を飲んでいる人ばかりの店だけど、私はお酒を飲むつもりなどもちろんなかった。
「えっと、コーラで」
無難と思われるソフトドリンクを注文する。ジュース全般滅多に飲まないけれど、コーラは好きだった。
「コークハイ？」
マークが聞き間違いをしたかな、という表情で聞いてくる。
「いえ……俺未成年なんで」
「あら？　……珍しいわねぇ。煉獄街でそんなこと気にする子なんていないわよ。
聖ちゃん、あんたどこからかどわかしてきたの、この子」
そんなに珍しいのだろうか？　少し驚いたようだけれど、どこかマークさんは面白がっているようだ。話を振られたのに無言の聖に代わり玄九朗さんが返事を返す。
「人聞きの悪いこと言ってやるなよ、マーク。
坊主は自分の意志でここにいるんだぜ。
それに……たまにはこういう奴も新鮮だろ？」
「ま、確かにそうよね。ああ、外が懐かしいわ。
コーラだったわね。はい、どうぞ。
そうだわ、あなた甘いもの好き？　よかったら、ケーキもサービスしてあげちゃうわよ。もちろん、私のて・づ・く・り！」
語尾にハートが付き添うな口調で、自らのお手製であることを強調するマークさん。正直可愛くない。似合っていない。でも、そこが可愛い気がした。
「えっと……ありがとうございます」
こんなにサービスしてもらっていいのか、と思いつつ好意は素直に受けることにする。ケーキなんて……数年前にケーキ屋さんでア

ルバイトをした時に残りものを分けてもらって以来食べていない。思わず顔の筋肉がゆるむ。
「可愛いわねぇ。いいわぁ、もう少しこの街にもこういう子が多ければ良いんだけど……」
「俺は、あんたはてっきりかっこいいタイプの男の方が好きなんだと思ってたがな」
「妬いてるの？　でも、それとこれとは別よ」
親しげに冗談を言い合い笑う二人をよそに、私は目の前のケーキに夢中だった。呆れたように聖が何かを言っていたようだけれど、それはほとんど私の耳に入らなかった。

「ところで、マーク。
昔の研究所跡があるだろ？　その辺りの情報に詳しい奴を知らないか？」
「珍しいわねぇ。
面倒事が嫌いな貴方が、そんなとこに興味を持つなんて……」
世間話に次いで軽く物騒なことを言う玄九朗さんにマークさんは困惑顔だ。彼は研究所跡は、プルガトリオが立ち入りを禁止している区域にあることを知っているのだろう。ところが、なぜか私の方をちらっと見て困ったように笑うと情報を提供してくれた。
「ナガレ……万屋の流のところに行ってみなさい。もしかすると、何か分かるかもしれないわよ」

アリキーノを出て、マークさんに教えてもらった“流”という人の住処へ向かう。私の遺産相続のために向かう場所が研究所跡だと聞かされたのはついさっきのことだ。聖はプルガトリオが指定した立ち入り禁止区域である、ことしか教えてくれなかったが、玄九朗さんはその場所がどんな場所かを少しだけど知っていて話してくれ

た。
通称“S”と呼ばれていたその研究所は、国が運営する大規模な施設だったらしい。
そこでは、優秀な魔術師十名が中心となって魔法やライカンスロープに関する研究を行っていたという。私の伯父もそこで働いていたことがあったのかもしれない。だとしても、何故そこに行く必要があるのかが分からない。マークさんの情報が確かなら、流さんはその研究所跡が今はどうなっているのかを知っているかもしれない。そうすれば、少しは行かなければいけない理由が見えてくるのではないか、と思う。もしかしたら、私の伯父がどんな人であったかも、流さんなら知っているかもしれない。母がなぜ遺産相続の話に関わらないよう言ったのかも……
そういえば、今の私がしていることは、母さんの意思にそむくことだということを思い出す。私は、病室のベットにいるだろう母さんのことを思い溜め息を吐いた。

流さんに会うため、私たちは黒い霧と錆びた鉄の臭いが充満する中を歩いていた。視界が悪いおかげで、私は周囲の様子に気にすることなく前に進むことができる。あまりその臭いになじみの無い私でも、聞こえてくる呻き声からそれが血の臭いだということぐらいは気付いていた。
店を出ると、外の空気はほんの三十分前とまったく違っていて……別世界に来たような気分になった。最初は煙かと思ったのだけれど、それは吸い込んでも咳き込むことがなく、風に流されることもなかった。だけど、それを見ていると不愉快な気分になる。なぜ気分が悪くなるのかは分からないけれど、黒い霧は劣化した魔力が霧状になったものなのだと聞いて、素直に納得できた。あれが、綺麗なものだとは思えなかったから。

そんな中、ほんの少しだけ白銀に輝く場所があることに気付く。近づけば近づくほど、それは輝きを増し、とても美しく見える。劣化していないどころか、不純物の入っていない……それは、純粋な魔力の残滓だった。

「ああ、こりゃあ……あいつが力を使った跡だな」

「ヌエか……　しばらく噂を聞かないと思ったら、これかよ。傍迷惑な奴だよな」

「あいつが力を使ったとなると、相手は狩人か。そこら辺に転がってるライカンスロープを蹴散らすのに、アルカナを使うようなことはないだろうからな」

玄九朗さんと聖は、この惨状を作り出した存在を知っているらしい。

目の前の煌きにそっと手を伸ばせば、それはキラキラ光りながら手に私に向かって纏わりついてくる。手の平から指の先から伝わってくる、熱は今の状況に似合わない安心感をくれた。間違いなく多くの人の命を奪った魔力なのに、なぜこんなにも綺麗なんだろう？

なぜこんなにも……惹かれるんだろう？　引きずられる感覚に身を任せるように目を閉じれば、思い浮かぶのは白い影。闇の中に浮かび上がる純白の……獣。この魔力の持ち主は、どんな人物なのか、と考えただけだった。

“ヌエ”

鮮明に浮かんだあの白い獣が、それであるという確信はなかった。彼の姿を見た者は殆どいないということから、確認する術は殆どないと思う。でも……いつか私はヌエと対面する……そんな予感がした。

流さんの住居らしい建物内は、とても人が住んでいるとは思えないような有様だった。部屋中を白く埋め尽くすのが、蜘蛛の糸だとすぐには気付くはずもなくて……私はその異様な光景に呆然としてしまう。まだ真新しいのだろう、それは白くて穢れない色をしている。繭のような塊の中から助けを求める声が聞こえるから、中に埋もれているのはどうも人間らしい。室内の様子に気をとられていた私は、近づいてくる足音にも気付かなかった。

「おや、これはまた珍しいお客さんだ」

私は、横から聞こえてきた声にびっくりして思わず短い悲鳴を上げてしまった。

「すみません。驚かせてしまいましたね。ここは少し騒がしいので……隣の部屋に移動しましょうか？」

勝手に住居に立ち入った私たちを咎めることもなく、現れた男の人は笑顔を向けてくる。サングラスのせいで目元は見えないが、その声はこちらに興味を示しているように感じた。変わった部屋の主らしく、彼の服装は少々変わっていて、洋服の上に艶やかな着物を羽織っている。独特ではあるけれど、それは黒く長い美しい彼の髪にとても似合っていた。

マークさんの紹介であることと、大雑把な依頼内容を話す。流さんは、大した報酬の見込みがないにも関わらず、何故かこの話に最初から乗り気だった。

「貴方は……もしかすると、木下さんでは？」

面白そうに話を聞いていた流さんは、急に真剣な顔をしてそう切り出した。彼の意外な言葉に私は動揺する。

「えっ、俺のこと知ってるんですか？」
「ええ、木下杏さんとは古い知り合いで……彼女に子供が一人いるということなら聞いています。なるほど……では、遺産相続というのは、真人さんのですか……」
　まさかこんなところに母の知人がいるとは……　聖に会ったときとはまた違うけれど、私の中で一気に流さんに対する親しみが増していく。
「あんたが真央の伯父と知り合いってことは、その人がどんな人だったかも知ってるわけだよな。じゃあ、今回の遺産相続についてもうちょっと詳しく知らないのか？」
「聖、そんな言い方は失礼だよ！」
　聖は、流さんの住居に入った時からぴりぴりしているのが私でも分かる。アヤシイ人だとは私もちょっと思うけれど、住居にいきなり押しかけた私たちに対して紳士的な態度を崩さない流さんに対しては失礼な態度をとりたくない。
「残念ながら、遺産相続の詳細は知りません。私が、真人さんや杏さんと最後に会ったのはもう十年近くも前のことですしね。今すぐに情報を提供するのは無理ですが、今回の件、私も微力ながらご協力しますよ」
　聖の質問に答えているようで、流さんはその場に自分と私しかいないように会話を話し続けている。彼は妙なほど“私には”友好的だった。協力を申し出るところなんか、私の手を握ってくるし、なんだか段々距離が近くなっている気がして、私は少し居心地が悪くなった。
「協力してくれるのは嬉しいんですけど……」
「随分と気前がいいじゃないか？　万屋の流といえば、依頼主を気に入らなければ仕事を請けない上に、気に入っても高い報酬を要求するって噂だがな」
　傍観者でいた玄九朗さんが面白そうに言う。その言葉で、聖の表情は緊張感を増すが、流さんは笑顔を崩す様子はない。流さんには、

私にお金がないことは話してある。もしも、彼が何か報酬を期待しているなら、それは伯父の遺産なのだろう。
「私も……出来ればあの研究所跡には関わりたくないですよ。でも、あなたが来てしまったならそうもいかない。真人さんや杏さんには、少なからず恩もありますし……
無償で……いえ、仕事ではなく真央さんのお母さんたちの友人として協力したいな、と思っています」
「恩返し……ですか？」
危険を冒すほどの恩があるというのは興味があった。全てを信じるわけではないけれど、だからこそ彼がまだ話していないことが知りたくなる。流さんは、私が煉獄街に来てから会った相手の中では、間違いなく一番遺産に近い。母さんが隠したがっている事にもきっと……
「胡散臭いにもほどがあるだろ？　真央帰るぞ」
「まぁ、待て。あやしいっていうなら、こっちだってそう変わらんさ。どうするか決めるべきなのは、坊主だろ」
聖に従って私はここを去ることもできる。でも、私がここに来て流さんに会った事実は消えない。もしも、流さんに何か思惑があったとしたら、それもまた今回の一件に関係ある気がした。
「俺は、流さんが協力してくれたら嬉しい」

第六話　野良犬

居場所を失くした哀れな下僕は主を探し彷徨う。
嘆きの声は主に届くことなく虚空に消える。
幾日待てど夜明けは訪れず、幼き闇は新たな支配者を求める。

「良かった。これで……不本意なことをせずに済みそうです」
笑顔でそう告げた流さんが、断っていたら、一体何をするつもりだったのかは、あまり考えたくない。ただ、もう一つ知りたいような知りたくないようなモノが視界に入り、そちらは思わず口に出してしまっていた。
「あ……あの、背中から何か出てます……けど」
流さんの長い髪の毛の間から何が蠢く虫の脚のようなモノが生えていた。意思を持って動いているようにも見えるそれは、認めたくないことだけど彼の一部らしい。
「ああ、失礼。仕舞い忘れていました。
おや？　そんなに恐がらなくても取って食べたりしませんよ」
「すみません。どうしても気になってしまって……」
蜘蛛の足なんですよ、と説明しつつ足を消していく流さんに謝罪する。それにしても、妙な光景だ。横で聖や玄九朗さんも微妙な表情で見ているから、煉獄街でも珍しいのだろう。そもそも、ライカンスロープは哺乳類に変身するものが多いと聞く。蜘蛛になる者がいるというのには驚いた。
「誰でも気になるだろ、あれは……」
「万屋の流が、美人だとは聞いていたが、本性が蜘蛛とはな」
もともと友好的とは言い難い聖だけでなく、玄九朗さんも流さんが蜘蛛のライカンスロープであることに関してはあまり快く思っていないみたいだ。

「ふふ、結構便利なんですよ。蜘蛛の糸はね。
気になるといえば……今回の一件、なかなか面白そうなメンバーが集まっていますね」
「流さんは、玄九朗さんや聖のことも知ってるんですか？」
酒場での周囲の様子を思い出す。二人は、一方的な知り合いも多そうだったので、流さんが知っているというも頷ける。流さんからは、やはり「彼らは目立ちますからね」という返事が返ってきた。
「お嬢ちゃんはともかく、俺はここに住み着いて長いしな。そういうお前さんだって、有名だろ？　どちらかというと悪い噂で」
「……どんな話かは聞かないでおきますよ」
床に転がっていた糸に閉じ込められた人間、万屋としての仕事の請け負い方などを知るだけでも、悪い噂が立つのは当然だろう。蜘蛛の糸に囚われた人たちは、流さんに危害を加えようとしたのかもしれないから、彼が悪いとは一概には言えないけれども。

協力者が増える度に機嫌が悪化していく聖だが、朝はまだましな方だった。彼らと早朝から顔を合わすことがないからだと思う。私が望んだこととはいえ、一見協調性がありそうで実はまったくないメンバーを集めてしまった気がする。
「真央、早く朝飯食べてくれよ。片付かないだろ」
「あ、ごめん。あれ？
ねぇ、聖、これってもしかしてカマンベールチーズ？」
白カビらしきものが生えている物体がテーブルの隅の方にあるのを見つけて、手に取る。聞こえ良く言えば、漂う芳醇な香、がするような……気もする。
「いや、違う。それはカビが生えた消費期限切れのチーズ。意図的にカビを生やしたわけじゃないから……って、こら！　真央、そのまま食べようとするなよ！　せめて、周りのカビをなんとかしてからにしろって！」

「そういえば、ちょっと苦みが強いかな？」
「……頼むから、拾い食いだけはするなよ」
すでに一口かじっていて感想を述べる私に、聖は脱力しながら注意してくる。腹痛とは長い間無縁の私だけど、いくらなんでも拾い食いはしない。食べれる草を採って食べるのは拾い食いじゃないよね？

朝食後、聖が出かけた後、私は流さんの住処へ行ってみることにした。一人で行動するな、という類の警告は何度も聞いた。けれど、じっとしてなんていられない。少しずつでも、自分の身を守る術を身につけたい。
「それが君の望みなんだね？」
聞き覚えのある幼い声。狐の面をつけた少年がまた目の前にいた。面に遮られて籠っているはずなのに、よく通るその声はどこか懐かしさを感じさせる。
「どうして力を望むの？」
「ここで生活するのに……真実を確かめるために必要だから……かな？」
緊張から口の中が渇く。不気味な少年を前に感じるのは少年への恐怖ではない。何か、頭の片隅に引っかかることがある。気になるのに、それに近づいてはならないと警報を鳴らす自分もいた。身に覚えのない記憶に戸惑う。
「分からないな」
心底不思議そうに、どこか残念そうに彼は呟いた。
「力も真実も……既に君の中にあるのに」

「真央さん、どうかしたんですか？」
少年と会った後、考え事に集中していた私はちゃんと流さんの所

へ辿り着いていた。どうやって来たかはよく覚えていない。様子が変だった私を気遣う流さんは、理由を深く追求しようとはしなかった。

私が流さんの家に来たのは、蜘蛛の糸の掃除を手伝うためだった。蜘蛛の糸は、ライカンスロープのアルカナと呼ばれる魔法のようなもので生成したものらしい。自然に消えるようなことがないので、後片付けは面倒なんですよ、と流さんがぼやいていたので、協力してくれるお礼代わりに掃除を手伝おうと決めた。

「良かったのですか？　何も貴方が手伝ってくれることないんですよ」

「良いんですよ。どうせ、聖の用事が終わるまでは一人でいなくちゃいけないんですから。

流さんと一緒だと、流さん自身が俺の敵にならない限りは、安全そうですし」

「貴方にはもう少し警戒心が必要かもしれませんね」

苦笑しながら流さんは、埃で汚れたサングラスを外した。布でふき取る姿に見入る。サングラスを外して現れた全容は、想像以上に美しかった。ただ、どこかで見たことがあるような懐かしさを覚える。先ほどの少年といい、何故なんだろう？

「今更なんですけど、俺って流さんに会ったことありません？」

流さんは、慣れた動作で、再びサングラスをかけた。それからの動作が綺麗で無駄のない動きだったため、反応が遅れた私は壁際に追い詰められていた。私の頭の両サイドに手をついて、顔を近づけ彼はやっと口を開く。

「古典的な口説き文句ですね。貴方がその気なら歓迎しますよ」

「冗談はやめて下さいよ。俺、そういう趣味はないんです」

「それは、残念」

動揺を隠して拒絶すると、思いのほかあっさり身を引いてくれたことに安堵する。彼の顔をどこで見たのか思い出せそうだったのは、先ほどの緊張感のせいで分からなくなってしまった。せっかくぼん

やりと形になりそうだったのが霧散したような感じだ。まぁ、私が流さんと会ったことがあってもおかしくはないだろう。幼い頃、伯父と会った際に、近くにいた可能性だってある。
「流さんが、沢山報酬を要求するのって、何か理由があったりするわけではないんですよね？」
「危険な仕事が多いから……というのが、一番の理由でしょうか。まぁ、請求しても心が痛まない相手からしか貰いませんよ。そういう客の方が多いんです。
今回の報酬、貴方自身なら喜んで貰うんですけどね」
流さんが大金を必要としていながら、無償で私へ協力してくれるというなら悪いと思って尋ねたのだけど、またはぐらかされてしまったような気がする。彼は美形でとても聴き心地の良い声の持ち主だけれど、それだけに口説かれても現実味を感じない。正直、ああ子供だと思ってからかっているんだな、と思うとちょっと凹んだ。
「流さんって、すっごく綺麗な顔してるからもてるんでしょうね」
「ええ。だから、サングラスは男避けなんですよ」
「……なら、なんで俺に冗談でも迫るんですか」
ちょっとしたいやみのつもりが素で返されてしまう。まぁ、あれだけ綺麗な顔をしていれば、同性にももてるだろう。サングラスをしたぐらいでは、隠しきれないほどの美貌を彼は持っている。
「抱かれるのはあまり好きではないんですが、抱く側なら性別は気にしない主義なんです。もちろん好みの相手ならですが」
そんなこと爽やかに言われても困る。
「なんだか、流さんに好かれた人って大変そうですね」
正直に思ったことを言うと、流さんは複雑そうに微笑んだ。

薄暗い路地を進む。一人でこういう場所を歩いていると初日を思い出すけれど、もうすぐ聖の住居なので問題ないだろう。流さんの住居を出て間もなく降り始めた雨は段々と激しくなっていく。彼が

貸してくれようとした傘を断らなければ良かった。雨で張り付いた服が鬱陶しい。廃墟とはいえ建物が多い地区なので、風がほとんどないのが救いだった。

雨の中に濃い錆びた鉄の匂いを感じて、私は足を止めた。生き物の気配を探して周囲を見回し、壁際の黒い物体に気づく。それは出かけた時には見なかったものだ。

「……まさか死体じゃないだろうな」

死体ではないことを願いつつその物体に近づく。それは黒い服を着た男だった。瞼を閉じて壁に背中を預けた姿からは、生気をほとんど感じない。微かに寝息が聞こえてくることで、生きていることが確認できた。

「なんだ、ちゃんと生きてるみたい……

お兄さん、そんなところにいると風邪引いちゃうよ。どこか屋根のあるところに移動した方がいいんじゃないかな？」

私の声に微かに顔を上げた男は目を開こうとはしなかった。言葉を発しようとしない彼に、余計なことをしてしまったかなと思う。

「余計なお世話だったかな……。それじゃ、俺もう行くね」

迂闊に目の前の男に声を掛けたことを後悔する。この事を聖に知られたら、絶対怒られるだろう。煉獄街にいる人間は、皆何かしら訳ありなのだ。声を掛けただけで、厄介事に巻き込まれる可能性がある。

男の傍を離れようとした直後、急に後ろに引っ張られた私はバランスを崩した。私の腕を掴んだ男によって倒れずに済んだけれど、転びそうになったのも彼のせいだ。

何故私を引き止めたんだろう？　相手の出方を待ちつつ、反撃方法と逃走経路を考える。体格からして、何かされそうになったら逃げるのが一番良いと思った。

「……あんた……好い匂いがする」

「はぁ……良い匂い？　別に香水なんてつけてないよ。むしろ、しばらくお風呂にも入ってないぐらいで」
予想外の言葉に、つい余計なことまで口にしてしまう。
「それより、放してくれないか」
見ず知らずの男に腕を掴まれている、という事実に恐怖と苛立ちが増していく。思わず声を荒げると男はあっさりと手を解放した。けれど、彼は私の傍を離れようとしない。
無言で立ち尽くす彼は捨てられた子犬のようにどこか寂しそうにも見える。瞼は開かないのではなく、開けないのではないか、とも思えた。彼は、顔を含めた身体中に傷を負っていた。ほとんどは古傷のようで、特に血を流している個所はない。なのに彼からは濃厚な血の匂いがした。表情からして、彼は男はこちらに対する警戒心はないようだ。どちらかというとリラックスしているような気もする。敵意がないのは良いことだが、何を考えているのかさっぱり分からないのが不気味だ。

「……ああ、もういいよ。一緒に来る？　雨宿りもできるしさ」
無視して歩き出しても後をついてくる男に、私はしびれをきらした。後をつけられるぐらいなら、一緒に行動した方がましだ。何より、これ以上拒絶しても無駄だろう。相手には悪意があるどころか、私がなぜ自分から離れていこうとするのか分かっていないようなのだから。
付いてくるようにように言った時に、彼は少しだけ顔をほころばせた。理由は分からないけれど、どうも彼に私は“懐かれた”らしい。

遅くなったことを謝罪しつつ部屋に入った私を見て聖は顔を盛大にしかめた。玄九朗さんが初めてこの部屋に来た時とは比較できな

いほど、嫌そうな顔をしている。
「真央……お前の後ろにいるのって、まさかヨミ？！」
「なんか付いてきちゃったんだよね。何？　聖の知り合い？」
「ああ、お前は知らないんだよな。何、変なの拾ってきてるんだよ……　すぐに、元居た場所に戻してこいよ」
「何言ってんのさ？　犬や猫を拾ってきたんじゃないんだから」
　青年をモノ扱いするような聖の態度にむっとする。彼が他人を連れてきて嫌がるのは分かるけれど、玄九朗さんの時よりも対応が悪い気がする。
「ここじゃあ、それが常識なんだよ。それに、それ狂犬だぜ。プルガトリオのボスの元四十三番目のペットで通称ヨミ……真央だって、これ以上厄介事は背負いたくないだろ？」
「ペット？！」
　厄介事がどうこうよりも、私はヨミというこの青年がペット扱いされていたという事実に衝撃を受けていた。世の中には色々な趣味の人がいるというが……
「お前さんたち、いったい何騒いでるんだ？　あ……ヨミじゃねぇか。なんでまたそいつがここに？」
　呆れたような表情で部屋に入ってきた玄九朗さんもヨミを見て驚いたような表情になる。一方皆に注目されているヨミは、私たちの話には興味がないみたいでただじっとしていた。
「玄九朗さんも彼のこと知っているんですね。ペットってどういうことなんですか？」
「黎……プルガトリオのボスのことなんだが、あいつはライカンスロープを集めるのが趣味でな。
そいつは、でっかい犬に変身する。強かったし忠実な性格をしてたから、黎のお気に入りだったんだが、最近捨てられたらしくてな。
今は、野良というわけだ。
お前さん、懐かれちまったのか？」
「よく分からないですけど……」

ヨミが犬に変身するというのは妙に納得できる。彼と捨て犬のイメージが重なったのも間違いでもなかったらしい。
「ヨミは、黎以外には懐かないどころか、あいつ以外の言葉は耳に入らないような奴なんだが」
「そうなんですか？　そういえば、俺ともまともに会話が成立していなかったような気も……」
私の匂い以外に対して特に口を開かなかったヨミのことを思い出す。彼は、一緒に来るように言った私の言葉には反応していたようだが、それ以外の言葉には無反応だった。
「おい、真央、まさかそいつを拾うつもりじゃないだろうな？」
「拾うというか、ヨミさえ良ければ一緒に行動するのはいいかな……別にいいんじゃない？　戦力になりそうだしさ」
まだ会ったばかりで特に思い入れがあるわけではなかったけれど、逆に一緒にいるのが嫌だという明確な理由もなかった。最初に感じた苛立ちも、ヨミを嫌うほどのものでもない。
「まぁ、戦力にはなるだろうな」
玄九朗さんは特に反対する気はないようだった。流さんの時も、彼は反対意見を出すことはなかった。誰を協力者にするかやその方法の最終的な決断は、全て私の自己判断に委ねるつもりなのだろう。嬉しい反面、試されているような気もする。
「マジかよ……確かにそいつは強いけど、お前そいつがどんな奴かも知らないだろ？」
「強いなら、敵に回る前に味方にしておいた方がいいんじゃないかな」
悪い噂があるような存在なら、なおさら敵に回したくない。そんなに自己が強くない彼は、どこか危なげだ。ヨミが誰にでも付いていかないのだとしても、私たちにとって都合が悪い存在の側に回るのは避けたい。
「お前がそれでいいんなら、好きにしろよ。なんで変なのばっかり集めるんだか……」

「お前さんも含めてな」
「……あんたが言うなよ」

「あれヨミ、どこ行くの？」
じっとしていたヨミが急に部屋を出ていく。放っておけば良かったのかもしれないけれど、背後で引きとめる聖の言葉を無視して私は外へ向かった。突如上がったカラスの鳴き声が耳をつく。あまりに煩いそれに頭痛を感じながらヨミの後を追う私に、カラスの声に異変を感じ取った玄九朗さんが続いた。

目の前の何とも言えない光景に息を飲む。外では何故かカラスを捕まえようとしているヨミと、そんな彼を威嚇し攻撃しようとしているカラスたちの姿があった。
慌てて“ヨミ”と呼びかけると、彼はカラスを相手にするのをやめてこちらにやってくる。
「何やってたの？」
驚いている私と違ってヨミは首をかしげながら淡々と意外な回答をくれた。
「……捕まえて食べる」
「カラスを？！」
「おいおい……たまに妙に数が減ってる気がしたが、お前が犯人か」
ヨミは何故私が叫んでいるのかさっぱり分からないらしくまたカラスに近づこうとする。玄九朗さんが何とも言えない表情でぽつりと呟くのを背後に聞きながら、ヨミをなんとか引き止めた。

お腹がすいていたらしいヨミとともに皆で食事をとることになった。

実際に見たわけではないけれど、どうもヨミはそこら辺の動植物を適当に食べていたらしい。私もびっくりの胃袋の持ち主だ。犬のライカンスロープなら鼻はよく利くだろうに、泥棒しようという方に思考が働かなかったあたりは前の主人の躾が良かったのか。捕まえるよりも人間から奪い取った方が、美味しいものを食べれるだろうに彼はそれをしなかったのだ。ヨミの様子を見るに、彼に料理ができるとはとても思えない。何でも生で食べていそうだ。とんでもない悪食。

「カラスって美味しいのかなぁ」

普通にパンや干し肉を食べているヨミを眺めながら考える。少なくとも彼にとっては美味しいのかもしれない。

「坊主も食べたいとか言いだすんじゃないだろうな」

「やめてくれよ。真央が言うと冗談に聞こえない」

「聖、それどういう意味だよ！」

食事を終えるとヨミはうとうとし始めた。もたれ掛かってくる大きな子供のような彼に苦笑しつつ髪をすいてやる。そして、髪に隠れるように項に浮かび上がる刻印に気づく。

「二匹の蛇の絡まった逆十字……プルガトリオのシンボルだな」

初めて身近に感じるプルガトリオの気配は不思議な感じだった。私がしようとしていることの障害となるだろう組織。未だ私には彼らの明確なイメージがなかった。ただ、どこか得体の知れない気味悪さだけを感じていた。

第七話　ライカンスロープ

魔は深淵より来たりて、人の狂気と交わり、闇の獣を産み落とす。
魔を宿す獣たちは、魔力を支配し己が力に変える。
されど、魔と人が混じることはない。
魔は、内側から蝕み彼らを滅びへと誘う。

アリキーノで食事をするのは煉獄街に来てからの楽しみの一つだった。訪れたのはほんの数回だけど、マスターのマークさんは良い人だしだされる軽食も美味しい。
私がこの街に来て数日。徐々に強くなる血生臭い空気の中で、ここは変わらないのが嬉しい。
ここに来るまでにも、沢山の死体を見かけた。しかも、ほとんどは食い散らかされたかのように体の一部が欠けている猟奇的な死体ばかりだった。
この街で長いマークさんや玄九朗さんでも、今の現状には困惑気味のようだ。
「やあねぇ。性質の悪いフルムーンが出回ってるっていうから、その影響かしら」
「だろうな。しかも、最近じゃあ、エクリプスに近いヤツまでその辺で売りさばいてやがる」
「フルムーン？　エクリプス？　……って何？」
二人の会話から考えると、あまり良くないものなんだろうということは分かった。この街でいるなら無関係とも言えないかもしれない。少なくとも町なかに増加傾向にある死体には関係があるようだ。
「……真央が知る必要ないもんだよ」
「おいおい、説明ぐらいはした方がいいだろうが。
坊主は、降魔剤って知ってるか？」

コウマザイ？　耳に馴染みのない単語だ。
私は素直に首を振りつつ、話を急かす。聖は、私がこの情報を知ることが嫌な様子だけど、純粋に興味もあった。
「そうか。
ライカンスロープになるには、降魔技師の力を借りないといけないってのは、知ってると思うが……
簡単に言うと、降魔剤ってのは、技師の力なしでライカンスロープ化が可能になるドラッグだ」
「そんな薬があったんだ……初めて知った」
それじゃあ、商業地区であったピンクの髪の少年・カイナが売っていた中にも、降魔剤があったかもしれない。彼は確かに“ライカンスロープ用”の薬があると言っていた。
「そうよ。特にエクリプスは、効果は絶大だけどその副作用が最悪で、普通は出回ったりしないし、正気の人間が手を出すような代物じゃないわ。
逆に、ライカンスロープ化を押さえる薬では、降魔抑制剤があるわね。
どちらも、危険なものだから、手を出さない方がいいことに変わりはないけど」
「この中で抑制剤が必要だとしたら、ヨミぐらいだろうが、その心配はないみたいだしな」

「単に現状に慣れていないからかもしれません。油断は禁物ですよ」
「あら、流、貴方が出歩くなんて珍しいわね」
カウンターに近づいてきた流さんの声には、穏やかな中に嫌悪感がにじんでいた。彼の鮮やかな着物の裾と艶やかな髪をなびかせて歩く様は、店内で浮いていた。あれだけ派手だと、目立たない場所の方が少ないとは思うけれど。
ヨミは危険視する聖や流さんの予想に反して、とても大人しくし

ていた。凶暴だったらしいが、そんな様子はまったくない。
私以外は、ヨミに対してまだ完全に警戒を解いていなかったが、中でも流さんは特に彼を危険視しているようだった。流さんは、プルガトリオに属していた頃のヨミと接触があり、何か被害を被ったことがあるのかもしれない。

「マオ、これ食べてもいい？」
「うん、いいよ」
ヨミは私がカラスを食べるのを止めて以来、物を食べる時は確認するようになってしまった。そんな彼の態度を玄九朗さんは面白がり、聖は呆れて、流さんは冷たい目で見ているみたいだ。
「犬のああずけみたいだな。まぁ、この調子で坊主が良い飼い主になれば問題ないだろう」
「犬科の動物に変身するってことは、そういう性格だってことだからな……厄介なのは、前の飼い主が登場した時だろ？」
そう、何より関わりたくないのは前の飼い主だ。トップの黎さんはもちろん、プルガトリオにも出来れば遭遇したくない。見聞きしたのは少ない情報だけど、今みたいな状況でなくても仲良くできる気がしない相手だった。
ヨミを捨てたということもそうだけど、私にはとても彼が大事にされていたとは思えなかった。傷だらけの体、失われた視力。それでも、ヨミはまだ黎さんを慕っているのだろうか？　話を聞く限りでは、懐いていたらしいので、あり得ないことではないかもしれない。私たちのためにも、ヨミを黎さんに会わせたくなかった。ヨミは会いたいかもしれないけれど……
今のヨミの首には赤い首輪が付けられている。それは、首の刻印を隠すための意味があった。彼の姿を知る者は私が予想していたよりも多く、あまり意味があるとは思えなかったけれど、ないよりはましだと思う。少しでもプルガトリオと距離を取るためには。

ライカンスロープは極度の興奮状態に陥ると、食人に走る傾向があるらしい。つまり今の煉獄街のライカンスロープたちは、出回っている降魔剤によってそういう状態になることが多いということだ。変身するのも感情の高ぶりが必要だという。降魔剤が興奮や快感をもたらすドラッグの一種とされるというのも頷けた。すぐに変身するためには、大量の興奮を促進する物質が含まれている必要があるわけだ。

それに、ライカンスロープになる際に体にいれる魔力そのものも人の脳に刺激を与える。ライカンスロープの力が危険であるのはもちろんだけど、彼らが猟奇的な行為に走る傾向があることが規制の理由だった。

護衛役のヨミを連れて街を散策する。今日の夕食の材料が目的だったけれど、少しぐらい寄り道しても良いだろうと思ったのは、甘かったかもしれない。危険な街で起こる狂気染みた事件の数々は、私の感覚を麻痺させてきていた。あれだけ、血が流れているのに、私は一度も被害を被らなかったからもあったとは思う。

「ヨミも人が美味しそうに見えたりするの？」

彼が言うとそれこそしゃれにならない気がする。そう思いながらも、興味はあった。未知の衝動には、恐怖と同時に興味もわく。

「マオはおいしそう。好い匂いがするから」

「……それ会った時も言ってたよね」

食べられるのはごめんだが、ヨミが最初に私にいった「好い匂い」がどんな匂いなのかは気になる。

「いったいどんな……わっ」

急にヨミに引き寄せられて私は転びそうになった。文句を言おうとヨミを見て息を飲む。彼は、見たこともないような表情で唸り声を上げ始めたのだ。

一瞬、玄九朗さんといた時に会ったカリオンと傀儡師のことを思い出す。ところが、今回は腐臭もうめき声も聞こえない。ただ、抑えたような足音が少しずつ近づいてくるのに気づく。

背後から聞こえてくる息使いに気づいたのは運が良かった。その存在を認識しても、相手からは気配をほとんど感じなかった。ネコ科の動物だろうか？　豹のようにも見えるけれど、実物をこんなに間近で見る機会なんて普通はないからわからない。

飛びかかってくるのを避ける時に頼れるのは勘しかなかった。あまりに速くて動きを目で追うのは難しい。ヨミが持たせておいたナイフで応戦してくれているけれど、彼一人で相手にできるとは思えない。思っていたより数が多い。

「ヨミ、変身できないかな？」

なんとか現状を好転させる方法を考える。少ない選択肢の中で、もっとも有効そうなのが変身したヨミに戦ってもらうことだった。

期待を込めてヨミを見た私に対し、彼は不安そうな表情で首を横に振る。あっさり承諾するかと思っていたので、それは予想外の反応だった。

「あれはイヤだ」

珍しく感情を表すヨミに私も困惑する。そのタイミングを襲撃者が見逃すわけがなかった。

集中力が途絶えたヨミに牙と爪が襲いかかる。何も考える余裕すらないまま、とっさに庇おうとしたけれど間に合わない。足に噛みつかれたヨミは、蹴りあげて相手を振り払う。だけど、それが余計に自らの傷を広げてしまった。

ヨミの傍へ駆け寄ろうとする私にも獣たちは爪を向ける。いつの間にか、私の腕や足も傷だらけで衣類に血がにじんでいた。
「ヨミ、変身して！　そうすれば、ヨミだけでも逃げれる……ヨミっ！」
拒否された要求だったものの、やっぱりそれしか突破口を見つけだすことができそうにない。叫ぶように望みを口にしながら、ヨミを見る。しかし、ヨミからの返事はない。
よく見ればヨミの様子がおかしかった。さきほどの動揺が嘘のように、再び目の前の敵に集中していたはずなのに、彼はまた茫然と立ち尽くしていた。危ないと思い、周囲を見回すと、襲撃者たちの動きもどこか鈍くなっていることに気づく。

「この気配は……」
「同じ匂いだ」
「なぜ……奴の匂いがする？」
内容を理解することはできなかったけれど、獣たちがうなるように声を発するのが分かった。人とは違う姿をした彼らが人語を話すのは違和感がある。ヨミも彼らも、何かの存在を察知しているらしい。匂いに反応しているようだけど、私は特に変わった匂いを感じ取ることはなかった。獣並みの嗅覚がある彼らと違い、普通の人間の私には分からない範囲の匂いなのかもしれない。
「今のうちに逃げよう」
ヨミの腕をつかみ走り出す。彼は、まだぼうっとしていたけれど、私の指示に従った。

何かに気をとられている彼らの輪を抜け出すのは思っていたよりも簡単だった。
慌てて、彼らは私たちの後を追ってくる。逃げるものを追ってし

まうという本能が彼らを動かすんだろうか？　それとも、それまで気にしていたことよりも、目の前の獲物を逃がしてしまうことの方が大変なことに思えたのかもしれない。
逃亡中にぶつけた肩がいたい。降り出した雨が、体温を奪っていく。意識が朦朧としてくる中、命がけの逃亡劇は閉幕しようとしていた。

雨の匂いに混じって血の臭気が辺りを満たす。私はただヨミの体が倒れてくるのをただ受け入れるしかなかった。もう、彼にも私にも逃げるだけの体力も気力も残ってはいない。
血まみれのヨミを抱きしめて庇うように獣たちを睨みつける。彼らは、追い詰めることを楽しむかのようにゆっくりとこちらに歩を進めてきた。
雨が私の血と混じりながら頬を伝っていく。
「マオ……血が」
ヨミが小さな声で呟くと同時にその変化は起きた。辺りを深い青の光が包み込む。それは闇に縁取られた禍々しい光だった。眩しくないけれど目に優しいとは言い難い光景に、私は目を閉じるしかない。
再び瞼を上げれば、見上げるような大きな黒い獣がそばにいた。形状は狼に近いものの、その大きさは巨大な虎に近い。私の感覚が麻痺していないなら、体長三メートル以上は余裕であるはずだ。そして、大きさよりも異常だったのは、その首が三つあることだった。

ケルベロス（地獄の番犬）を彷彿とさせる容姿は、この街の住人でも異様だったらしい。
「……合成獣か？」
現実でいない幻想動物の多くは複数の動物の特徴を併せ持つこと

が多い。だけど……この場合も、合成獣と呼べるのだろうか？
「馬鹿な。そんな化け物は、アイツしかいないはずだ」
「じゃあ、目の前のアレはなんだ？」
伝わってくるのは動揺と何かに対する恐怖。目の前のこの獣よりも、別の存在に対するもののようだった。
……目の前の獣。目の前？
「まさかヨミなの……か？」
決して開かれることのない瞼。見間違いようもない、鮮やかな深紅の首輪。（どういう原理なのかは不明だが、なぜか体に合わせて大きくなっている）彼の変身は初めてみるけれど、それ以外に考えられない。
周囲にまたも騒ぎ始める。ヨミは有名だったらしいから、名前に反応したのだろう。
「ヨミだって？　プルガトリオの番犬のことか？」
「そうだけど」
恐る恐る尋ねる獣に、つい普通に答えてしまう。この場にいて困惑しているという点では、私も彼らも同じだった。
「変身したヨミに、頭が三つあったなんて聞いたことがないぞ」
そんなこと私だって聞いたことがない。
傍らの巨体を見つめつつどうしたものかと考える。変身して欲しいという望みは叶ったものの、一言も言葉を発しないヨミの状態が気になったからだ。あんなに嫌がるぐらいだから、変身してショックでも受けているのだろうか？
一歩近づき、名前を呼ぶ。同時に興味から伸ばした手が空を切った。

「ひっ」
「ぎゃぁああっ！！」
何の前触れもなく聞こえる悲鳴。微かな雨音を打ち消すように、

絶叫が上がる。腕や足……生首が中を舞う。それが生き物の体の一部で、私の頬にかかったのが血だと理解するのには時間がかかった。返り血を浴びるなんて、今までの生活では考えてもみなかったことだ。

黒い巨体の下で爪を立てられた胴体から、首が引きちぎられる。三つの顎の内の一つが頭蓋骨をかみ砕く音が生々しく響く。

「……何故こんな……」

声を出して初めて自分が震えていると気づく。玄九朗さんの戦う様を見ていた時とはまた違う。あの時は、玄九朗さんだけは味方なのだという安心感があった。まだ玄九朗さんとは会ったばかりだったけれど、彼の刃が私を切り刻むことはない、という信頼があったからこそ平常心を保てた。だけど、目の前のライカンスロープに、ヨミだろうあの獣に、私は味方だという確信を抱くことができない。

今回は相手も違う。カリオンのような偽りの命を吹き込まれた腐った死体は、化け物だとしか思えなかった。でも、今切り裂かれバラバラにされているのは、獣の姿をしているけれど生きた人間だ。

むしろ、化け物は……　いや、聞いていたはずだ。ヨミが危険な人物なのだ、と。分かっていて一緒にいたのだから、これは私の責任でもある。

「ヨミ!!　やめて!　やめるんだ!」

情けないことに、私はそう叫んでとめるしかなかった。話せば分かる、なんて状況じゃないことは見れば分かるのにだ。だけど、私には他に良い案が浮かぶような頭も、ライカンスロープのような力もないのだから仕方がない。

必死でヨミの毛を引っ張って止めようとしたけれど、ただ引き摺り回されただけだった。今の彼には私の声が届いていない。

息をしているのが私とヨミだけになるまで、殺戮は続いた。耳を塞ぐことも、逃げることも出来ないまま私はただその場に立ちつく

すだけ。血と雨が染み込んだ服は、地面の汚れも吸収してしまいドロドロになっている。体が重いのは、精神状態のせいだけじゃないと思った。

二人だけになってしばらくするとヨミが変身した時と同じ光が彼を包んだ。

「ぐっぁああ」

苦痛に耐えるような叫びをあげて彼はうずくまる。人の姿に戻った彼の姿を見て、やっと悪夢が終わったのだな、と安堵する。生きていたことに喜びを感じても、襲ってきた連中を倒せたことに対する嬉しさなんてもちろんない。ただ、はっきりと言葉で言い表せないような不快感だけがある。あまりに後味が悪すぎる。

自分の体を抱き呻いているヨミにゆっくり近づく。怖くないわけでもないが、苦しんでいるヨミを放置して去る気にはなれない。

地面に仰向けに倒されたおかげで背中が痛い。何故、こうなってしまったのか、朦朧とした今の頭ではさっぱり想像もつかない。

「……マオ」

「ヨミ、退いて」

「やっぱり、マオはとってもおいしい。

もっと……もっとマオの血が欲しい。ダメ？」

私を押し倒して、ヨミはそう囁いた。持ちあげされた腕に彼が舌をはわす。肩の傷に歯を立てられて、麻痺していた痛みが再度私を襲う。私の許可を求めているようで、私の答えなんて聞くつもりもないようだ。

「駄目に決まってるだろうが！！」

右肩から顔を離して、今度は反対側の肩に顔を近づけてくるヨミに、狙いを定めて頭突きをくらわす。軽くだが悲鳴を上げて離れた

ヨミを見て、複雑な気分になった。　……強靭な肉体を持つはずのライカンスロープにも、私の石頭はダメージを与えることが可能らしい。どんだけ硬いんだ？

「マオ……頭がいたい。俺、何か悪いことした？」

「はぁ……帰るよ」

正気に戻ったらしいヨミの言葉に脱力しつつ、彼の腰に自分の上着を巻き付ける。そのまま連れて帰るのは気が引けた。

彼は全裸だった。変身すると人間の姿の時よりも大きくなる場合、変身する際に来ていた衣服は、破れてしまうものらしい。足もとに見覚えのある服の切れ端が落ちていた。流さんの蜘蛛の糸が魔法によって出されたものでも勝手に消えてくれないのと同じようなものかもしれないな、と思った。なんでも、都合よくは出来ていない。

ここは「きゃあ！！」って叫ぶところなんだろうか？　それならむしろ地面が赤く染まっていく過程でそうするべきだったろう。殺戮と異性の全裸。どちらにより衝撃を受けるかなんて、決まっていそうなものだけど、まぁ人それぞれだろう。確かなのは、もう今の私には叫ぶ気力なんて残っていないってことだ。

第八話　プルガトリオ

闇に育った子供たちは夜明けを厭う。
黎明期に親たちが感じた絶望を記憶しているかのように。
常闇の街に黎明をもたらしたのは地獄の王。
支配するは歪んだ狂気。従うは抑圧された欲望。
王の憎悪は神と魔に、愛情は闇の獣たちに注がれる。
されど彼は闇に染まらず。

血まみれの私とヨミを見た時の三人の反応はそれぞれまったく違っていた。聖は怒りを通り越して呆れ、玄九朗さんは何があったのかに興味を持ち、流さんは無言で私の肩に上着をかけて新しい服を探しに行ってくれた。
流さんが持ってきてくれたのは前に着ていたものと似たようなものだった。正直なところ、奇抜なセンスの服や着物を持ってこられたらどうしようか、と心配していたのでほっとする。
そして、流さんは、あれだけ嫌っていたヨミの服もちゃんと用意してくれた。本当に気が利く人だと思う。ただ、無言だったのは実は怒っていたからじゃないかと思うと少し怖い。

「暴走した時も、止めることができるようになりゃあ、一人前の飼い主なんだがな」
心配してくれている聖や流さんとは対称的に、玄九朗さんは面白がっているように見えるのは気のせいだろうか？　気のせいだと思いたい。
確かにヨミの暴走を止める手段がないのは、危険だろう。でも、私にそれが可能だろうか……　変身したライカンスロープに対して、

私はあまりにも無力だ。
「それは、危険過ぎます。
暴走した時は逃げた方が良いと思いますけどね」
「そりゃあ、駄目だな。あんたは、逃げられると追いたくならないか？」
犬は逃げるものを追いかける性質がある。本人は遊んでいるつもりでも、その犬がヨミだと洒落にならない。捕まったらどうなるか、なんて想像もしたくない。
「……否定はしませんが、目の前に他の獲物があっても追うでしょうかねぇ」
「確かに、集中してる時は他は気にもとめてなさそうだったけど」
ヨミは目が見えない代わりに、耳と鼻が良く利く。なのに、襲ってきたライカンスロープたちを攻撃している時の彼に私の声は届いていなかった。逃げる足音や遠ざかる匂いを感じとって追ってくるか、というと来ない気がする。
一瞬、蜘蛛になって追ってくる流さんを想像してしまったが、それは頭の隅に追いやる。だって、怖すぎる……獣化したヨミに追われるのとは違う恐怖があるんじゃないだろうか？
「お前さんたち忘れてないか？
ここで重要になってくるのは、坊主の血をヨミが気に入っているってことだ」

ヨミは私の血が美味しいと言っていた。もっと欲しい、とも。あの時のことを思い出すと、彼に噛みつかれて酷くなった肩の傷が痛む。
「血については、あとで調べてみようと思っているんです。
ヨミが彼の血を気にする理由が分かるかもしれませんからね」
調査をしてもらえる所に心当たりがあるという流さんに、血に関

してはお任せすることにする。単なるヨミの好みに起因している場合も考えられるけれど、流さんが調べたいというなら何か心当たりがあるのかもしれない。
「ヨミの変身後の姿が情報と違うことはどうするんですか？」
今回のヨミの暴走では気になることが沢山あるが、中でもインパクトがあったのはこれだった。
「実在しない生き物に変身するライカンスロープもいるにはいるのですが……」
「有名なのだと、ヌエの野郎がそうだな」
「ヌエ……」
先日大量虐殺の現場を通ったことを思い出す。白銀の魔力と純白の肢体を持った美しい獣。
「やっぱり妙だな」
聖の声で現実に引き戻される。やっぱりなぜか私はヌエが気になるらしい。

年輩組が会話をする横で聖はパソコンで何かを調べいた。話に割り込んできたということは、何かが分かったんだろう。
「プルガトリオで管理されているライカンスロープのデータによると、ヨミが変身するのは普通の犬らしい。
変身後の姿を変更する方法なんて俺は聞いたことがない」
人が魔力によって獣に変化する際、その姿は基本的には毎度同じなのだという。徐々に姿が変化していく事はあっても、急に他の獣に変身することはないらしい。玄九朗さんや流さんも、ヨミのような例は知らないと答えた。
「ヨミに何らかの変化が起きたのは確かだろう。
珍しいライカンスロープなら、あいつが手放すわけないからな」
「あいつは収集癖があるからな……」
玄九朗さんと聖は、それぞれ度合いは違うが嫌そうな表情を浮か

べていた。
「黎って人のこと？」
ヨミを手放したと言えば、プルガトリオのボスのことだろう。そういえば、彼はライカンスロープを集めるのが趣味だと、以前玄九朗さんが言っていた。
「ええ、ヨミの元飼い主のね。噂をすれば、ほら……彼の部下たちのご登場ですよ」

流さんが示した窓の外を覗いてみる。
「……何、あのコスプレ集団？　近くでイベントやライブがあるわけじゃないよね？」
すぐに目に入ったのは、黒い軍服のような服を着た集団だった。あまりに目立つのでつい反応してしまったのだが、流さんが言ったのは彼らのことで間違いないだろう。他に変わった物は見えなかったからだ。
「なんだ、坊主はまだあいつらを見たことがなかったのか？」
会わずに帰れれば良かったのにな、と言いつつ笑っている玄九朗さんに続いて、流さんが不機嫌そうに説明する。
「彼らはプルガトリオのボスの親衛隊ですよ。軍服のような服は組織の制服です」
「そんなのがあるんですか……」
それは、親衛隊と軍服のような制服、両方に対する感想だった。自分が今まで住んでいた国とは違う国の、いや、別世界の話を聞いているような気がする。
「真央、そろそろ顔を引っ込めとけよ！
奴らに目を付けられたら、面倒なことになる」
聖の住居の周辺にも少ないとはいえ人はいるが、今は彼らと彼ら以外の姿が今は見えない。皆、親衛隊に見つかるのを恐れてどこかに隠れてしまったのだろう。

「……規則を守って大人しくしていれば安全という相手でもありませんからね」
「坊主、よく覚えておけよ。
よっぽど強い奴でもない限り、連中に気に入られたり嫌われたりしたら、ここじゃあ生活できない」
「嫌われたら、ってのは分かるけど……なんで気に入られてもダメなの？」
私としては当然の質問だったのだけど、三人はそれぞれ微妙な表情をして押し黙った。

沈黙を破ったのは、玄九朗さんだった。言いたくなさそうに黙った他の二人と違い、こちらは思案顔だったので、何か答えてくれそうな気はしていた。
「あのだな……そりゃあお前、嬲り殺しにされるか……ボスの黎や、その部下のペットにされちまうからだろうが」
「嬲り殺しにされる！？　ペット……って人間が？
いや、ああ、そっか。ヨミは黎さんのペットだったんだよね……」
ヨミを見ると彼は何かに脅えるように体を丸めていた。親衛隊が近くにいることを察しているのかもしれない。
「プルガトリオの上層部は、そういう趣味というか性癖の奴が多いんだよ。
黎がライカンスロープを飼い馴らすのを好んでいるように、気に入った相手を痛めつけることに快感を覚えたり奴隷趣味とかを持ってる奴がな」
「気にいられると、冤罪を着せて連行されるのが定番ですよね」
間近で連行される者たちを見てきたのだろう彼らの言葉には重みがあった。流さんも美人だし、珍しい蜘蛛のライカンスロープだから、狙われたことがあるのかもしれない。
「お前のように上手く逃れる者もいるがね」

聞き覚えのない声が扉の方からして、私たちは身構えた。
今までは抑えていたらしい靴音が室内まで響いて扉が開く。身近では聞くことがない軍靴の音に緊張する。部屋の外にいるのは一人ではなかった。それは、ついさっきまで外にいたはずの親衛隊らしき男たちだった。近くで見て気づいたが、雰囲気こそ違うものの彼らは皆それぞれ整った顔立ちをしている。
先ほどのは、先頭にいる人物が発した言葉だったらしい。男は一人だけ白い軍服を着ていて酷く目立つ。
銀色にも見える美しい白髪に縁取られた顔は、鑑賞用の人形のように整っていて隙がない。怖いぐらいの美貌は流さんと同じだけど、タイプが違う。誘い込む闇のような魅力を持つ流さんに対し、彼は近づき難いのに酷く惹きつけられる、そんな魅力を持っている。あまり縁がないタイプだから、よく分からないけど……これがいわゆるカリスマ性という奴なのかな？
ほとんど動かない表情とは逆に声は静かでありながら大げさなしゃべり方なのが気になる。芝居掛かった言動をする人物だと思った。

白髪の男は、流さんに微かな笑みを向け言う。
「それに……冤罪ではないだろう？
この街に罪を犯していない者などいはしないのだから」
間違いではないのかもしれない。そう、ここは罪人たちの街。法律という見えない壁で囲まれ、入った者はそれまでの罪の有無を問わず皆一応に罪人とみなされる。もちろん私も例外ではない。

三人は静かに私を囲むように移動する。私には皆は落ち着いているように見えた。何も言わなかったけれど、私と違って彼らが近付

いてくるのに早くから気付いていたのかもしれない。逃げなかった理由は私でも分かる。見える範囲にいた彼らから逃げ隠れするのは容易ではないだろう。
「お久しぶりですね……黎」
「そう、麗しい蜘蛛を逃したのはいつだったか……随分と昔のことのような気がするよ。
さしずめ私は美しい蜘蛛の糸に心を囚われた哀れな蝶と言ったところかな」
「ふふふ……それでは、蝶に失礼ですよ」
二人とも一見穏やかに微笑しながら会話しているが、目が笑っていない。
「これは、手厳しい。
お前のその態度は私の好む所ではあるが……残念ながら今日はお前ではなく、こちらに用があるのだよ」

冷たい双眸が私の姿を捉える。ゆっくりとこちらを眺めていた彼の顔が次第に不愉快そうなものに変わっていく。
「君が真央か？
カイナが気に入ったというから一目見ようと足を運んだのだが……なんということだ」
そう言った黎さんは、より顔を歪める。嫌悪するかのようなそれに私は眉をひそめた。不愉快だったのもあるが、いったい何が気に食わないというのだろう？

「まぁ、いい。私とカイナが同じ奴隷を取り合うという展開は避けられそうだ」
「坊主、気にするな。お前がこいつの趣味に合わなかったってだけの話だ」

さり気なく怖い単語が聞こえた気がするが、気にしないことにする。先日買い物中に会ったカイナが私を気に入ったというのは意外ではなかった。しかし、彼もプルガトリオの一員だったとは……そんなに危険な存在なら、聖もすぐに言っておいてくれれば良かったのに。この様子だと、カイナは組織のボスと親しい存在みたいじゃないか。

「貴様……私の前に姿を見せるな、と言っておいただろう？目障りな、出来損ないが」

黎さんが、話に割り込んできた玄九朗さんに向けた目は、私に向けたのとはまた種類が違う。ただ嫌っているというのではすまされないぐらいの冷たい視線だった。

「一体何を」

自分から部屋に入ってきておいて、この言い様は酷い。用事があってここに出向いたのなら、玄九朗さんがこの部屋にいることも知っていただろうに。

「いいんだ坊主。これは、奴と俺の問題だ。昔から嫌われていたんだが、半端者のライカンスロープになったことでより一層嫌われたらしくてな。会うたびにこれだ。俺はむしろ気にかけている方なんだが」

真剣な黎さんに対して、玄九朗さんの言動は軽い。彼は部屋で一人だけ異質な空気を放っていた。普段の玄九朗さんを見ていると忘れてしまいそうになるけれど、彼もまた煉獄街の人間なんだとこういう瞬間思い出させる。

玄九朗さんの態度は、黎さんにとっては予想通りのものだったようだ。余計に怒るんじゃないかと心配もしたけれど、意外にも黎さんは冷めたように呟いた。

「私は貴様のそういうところが嫌いなんだ。私を見る目も、あの人にそっくりでね」

「ああ、あの人と言えば、また何か企んでるらしいぞ。放っておいていいのか？」
あの人というのは、どうも二人の共通の知人らしい。周囲を無視して、二人は会話を続ける。
「貴様に言われるまでもない。
忌々しいあの女なら、これ以上鬱陶しい真似をするようなら始末しようと思っていたところだ」
「好きにしろ……と言いたいところだが、あれでも身内なんでな。過激な対処をするのは、ご遠慮願いたいんだが」
玄九朗さんは、不穏な発言にも動じた様子はない。話にはついていけないが、新しい情報は入った。
煉獄街にいる三人の現状は分かり辛い部分が多い。玄九朗さんに身内がいるというのは、想像し難いことだった。本来なら妻子がいてもおかしくない年齢ではあるが、そういう素振りは見られなかったからだ。他の家族についての話も聞いたことがない。それは、聖や流さんも同じだった。
「はっ、貴様が身内を庇うとは、笑わせてくれる」
「お前の言うことはもっともだ。だが、知っているだろう？
俺は気まぐれだからな」
駄目だ。やっぱり玄九朗さんは黎さんとの会話を楽しんでいるようにしか見えない。二人の関係が何であれ、二人の互いに対する感情には温度差があるみたいだ。
「ふんっ、興が削がれた。今日はこれで失礼するとしよう。
君たちも気をつけることだ。そのカラスは何度も自分に近しい存在を裏切ってきたからな」
警告の言葉を吐き捨てるように言い、黎さんは部屋を出ていく。長めの白い軍服の上着を翻して去る様は絵になっていた。芝居がかったそれはかっこいいと言えなくもなかったけれど、今の私の心境はそれどころではない。
ボスの退場に続いて親衛隊も部屋を出ていく。彼らは入室してか

ら退室するまで一言も口を開くことはなかった。始終無表情で何を考えているのか分からなかったが、外にいた人たちはもっと感情を表に出していたと思う。ボスの前だから、態度が違うのかもしれない。

今更だが、私たち四人に信頼関係が成立する理由なんてものは存在しない。なので、今更、玄九朗さんに裏切りの前科があったところでどうだというのだろう？　現状にはあまり影響がない気もする。それに、黎さんの言葉を鵜呑みにすることもないだろう。単に疑心暗鬼に駆られた私たちが仲間割れするのを狙っている可能性もあるわけだし……

「……既にカイナと面識があったとは、注意するのが遅すぎたようですね」

まぁ、黎と会ってしまった今、カイナと会ったことなんて瑣末なことですが、と流さんは続ける。

「プルガトリオの幹部だからな、あれでも。お嬢ちゃんはこのことを知っていたようだが」

「会ってしまったもんは仕方ないだろ？　真央を不安にさせたくなかったんだ」

キス事件でそれどころではなかったような気もするが、それは置いておこう。

「……レイ……さま」

低い小さな声が部屋の隅で聞こえて、ふと目をそちらに向ける。そういえば、黎さんは一度もヨミに声を掛けなかった。　……彼にとって、ヨミはそれだけの価値もない存在だったということだろうか。二人の絆が断たれていなかったとしても危険だが、これはこれで酷い。

「ヨミ」
「あっ……マオ、ごめんなさい」
「なんで、謝るの？」
うわ言のように謝罪の言葉を口にしながら、ヨミの目は私を映していない。どこか遠くの存在に、怯えているように見えた。私の質問は余計に彼を追いつめてしまったようだ。
「真央さん……黎を様付けで呼んだことか、貴方を噛んだことを謝罪しているのでは。
恐らく、黎は些細なことでも機嫌を悪くして、彼を叱った。それを思い出しているのでしょう」
「……」
無言でヨミを抱きよせて頭を撫でる。次第に彼の震えが治まり、顔を摺り寄せてくるようになった。取りあえずは一安心……かな。
また、余計なことを言ってしまうかもしれない。そう思うと、何も言えなかった。

第九話　狩人

魔導師たちの命の下、狩人たちは獣を追う。
魔獣狩る者の手には、魔力持つ剣。
彼らがまとうのは、偽りの光。
掲げるのは、血に塗れた偽善。
闇追う者もまた、闇に染まり堕ちる。

プルガトリオのボスと初遭遇した日、私たちは用心して特に何の行動も起こさず解散した。プルガトリオは、こちらの不審な動きに気づいているのでは、という不安があったからだ。私も、黎さんが私を見るためだけにここに来たとは考えられなかった。

翌朝私は日の出頃に目を覚ました。今朝はよく冷える。日の出の時刻を過ぎても辺りは薄暗く（もっとも、この煉獄街では明るい場所の方が少ないのだが）、劣化した魔力の霧で辺りが覆われているのが室内からでも分かった。聖が今日は午後から行動しようというので、私はもう少し横になることにした。ヨミが不安そうな表情で寄り添ってくるのを宥めている内に、私は眠ってしまっていた。

静まり返った街に爆発音がとどろいたのは、正午前だっただろうか。窓が震える音を聞きながら私は体を起こした。聖が舌打ちをしてキーボードを打つ手を止める。

「一体何の音？」

「……魔狩人。また、厄介なのが来たな。
玄九朗と一緒にいた時に、傀儡師っていうのに会ったって言ってただろ？
あれの同業者」

青白い女の人の顔を思い出す。死体に魔力を吹き込みカリオンに変えて襲い掛かってきた人だ。
今回の爆破といい、どうも魔狩人にはとんでもない人が多いらしい。なぜそう思うかというと、聖が平然としているからだ。魔狩人が無茶苦茶なことをするのは、ここでは普通だということなんだろう。

「ここは無事みたいだな」
正午過ぎ、埃を払いながら部屋に入ってきた玄九朗さんは、いつもよりもくたびれた格好をしている。どうやら、爆破に巻き込まれたらしい。怪我はしていなかったようで、良かった。
珍しく玄九朗さんは、煙草を吸っていてその煙が室内に静かに広がっていく。聖は眉をひそめているが、私は不快感よりも好奇心が勝った。
「玄九朗さんが煙草を吸ってるの初めて見ました」
「ん？　……ああ、今は止めてるんだが、昔を思い出してな」
今気づいたというように手元を見た、玄九朗さんはどこか遠い目をして呟く。聞き取りづらいその声をかき消すように、子供の声が重なった。
「それは、思い出さずにはいられないでしょう。今日は親友の命日ですものねぇ？　玄九朗さん」
その口調は笑うように歌うように楽しそうだが、声のトーンは低く声の主の負の感情を隠すことなく伝えてくる。
玄九朗さんの背後から現れたのは、十代前半の少女だった。ウェーブの掛かった淡い金色の髪に、大量のレースがついたロリータ風のドレスを着た愛らしい人形のような少女。そして、少女が手にしているのは、彼女に不似合いな銃器。いわゆるマシンガンだと思う。

少女は、玄九朗さんを一睨みした後に、こちらを見てにっこり微笑んだ。
「あら、見ない顔。新顔ね？　さっきは騒がしくしてごめんなさい。鬱陶しいライカンスロープを見ると我慢出来なくて、つい」
申し訳ないなんて欠片も思っていない様子で少女は嗤う。彼女が先ほど何かを爆破した魔狩人らしい。得体の知れないものを目の前にしたような感覚に戸惑う。目の前の少女が何を考えているのか、本の少しも想像できないからだ。
「レヴィ……やっぱりお前か」
レヴィ、というのは少女の名前なのだろう。玄九朗さんは、そこだけ搾り出すように口にして、後は呆れたように言葉を繋げる。柔らかく話そうとして失敗している感じだ。違和感がある。彼にとって、レヴィはあまり歓迎したくない相手のようだ。
「珍しいこともあるもんね。玄九朗さんが誰かと行動を共にしてるなんて……
でも、仲間なら、玄九朗さんが私を彼らに紹介してくれなきゃ。
……自分が裏切った親友の妹、だってね」
「なるほど、黎の言ってたこと絡みの人物か」
「信用するの？」
「別に、どうでもいいさ。俺は、端からこのおっさんのことなんて信用してないんだから。
俺らに用がないなら、他所でやってくれないか？」
私も昨日似たようなことを考えたが、聖は私以上に徹底している。玄九朗さんを信用できるかどうかなど気にも留めていないのだと分かる。
「そうさせてもらうか」
「用はあるかもよ。
だって、彼からは魔力の臭いがするわ」

皆が黙り込む。それぞれ理由は違っただろうが、私にとっては予想外の指摘だったからに他ならない。
「それって……俺のこと？」
自信が持てなくて小さな声で問う。対して返事は鋭くはっきりとしたものだった。
「ええ、そうよ」
「おいおい、レヴィ何言ってんだ。
坊主がライカンスロープなわけないだろう」
混乱する私の心を玄九朗さんが代弁してくれる。レヴィはそれを鼻で笑って、再度私に視線を向ける。
「流石は、完全に獣化できない半端者。魔力の臭いも分からないの？ライカンスロープでない私ですら分かるのに」
レヴィが私に近づいてくる。どうしようかと立ちつくす私の前に聖とヨミが立つ。感謝しつつも、こういうことがある度に思い知らされる。情けないことだけれど、私には自分の身を守る術すらないのだ、と。

玄九朗さんも、レヴィの前に立ちそれ以上こちらに近づくのを阻んだ。
「庇うの？　どういう心境の変化があったのかしら。
面白い。ライカンスロープの騎士たちに守られたお姫様。
ますます正体が気になってきた。
今回は引いてあげる。
玄九朗が、兄さんの命日をちゃんと覚えていたからね」
「レヴィ、いくら俺でもあいつのことは忘れんさ」
スカートを翻して入り口へ向かうレヴィに玄九朗さんが声を掛ける。それはいつになく真剣な声だった。
「どうだか……じゃあね」
一瞬だけだったけれど、レヴィは邪気の無い純粋な笑みを浮かべ

ていたように見えた。

魔狩人が来た日は、他の同業者も来る可能性が高いらしい。危険な立場にある彼らは、同時に数箇所を襲撃することが多いという。

私たちは警戒しつつ買い物と情報収集に出かけた。

「マオ、そっちはイヤな臭いがする」

ヨミは私の袖を引っ張って首を振っている。玄九朗さんが刀を取り出して先の様子を見に行った。

「坊主、思い出したくないだろうが……また、あの傀儡師のお出ましだ」

頭をかきながら戻ってきた玄九朗さんは、複雑そうな顔をしている。今度は先日無かった人形も持ってきているらしい。カリオンを再度見たくない私としてはその方が良い気もしたが、そうでもない。傀儡師は、カリオンよりも人形を操って戦う方が断然強いというのだ。

「あ……あ、ああなたたち、せ先日はよくも……やってくれたわね。き、今日は、そう……は、いかない」

「俺たちは何もやってない気がするけど……」

「ああいうタイプは逆恨みするもんだ」

襲ってきたから応戦しただけだなわけだが、まぁ相手としては負けて屈辱を味わったことになるのかもしれない。人を見かけで判断したくはないが、傀儡師は思い込みが激しそうだとは私も思った。

「適当なこと言うなよな。あんたのことだから、恨みの一つや二つ買ってるんじゃないのか？」

通路から現れた人形たちが襲い掛かってくるのを打ち落としつつ聖がぼやく。聖は接近戦より飛び道具メインで戦うタイプのようだ。命中率はなかなか良いように見える。

私の背後では、ヨミがナイフと素手で人形を撃退していた。彼の動きは目が見えていないのが嘘のように無駄が無い。

一体の人形が何かを抱えているのに気づいたのは、私もなんとか数体の人形を壊してからのことだった。腕の中から助け出すと、それは茶色い犬だった。身動ぎした犬は、目を開き私を見るなり威嚇のうなり声を上げる。

獣に変化が現れたのはすぐだった。もがき苦しみ体を暗い光が包む。ライカンスロープが姿を変える予兆だ、とすぐに分かった。ヨミの時ほど大袈裟なものではないが、それに似ていいる。

鼻先が短くなり人のものに、長い毛が薄い産毛に変わっていく様を間近で見るのは不思議な感覚だった。しばらくして私の目の前にいたのは、幼い少女だった。傷だらけの肌が痛々しい。怪我の手当てをしようと手を伸ばすと、手を引っかかれてしまった。人の姿になって唸り声が止んだからといって、相手が私に気を許したわけではなかったのだ。

一歩後退した私の隙をついてその子は姿を消した。それは、私が怯んでいなくても十分逃げることは可能な素早さだった。

傀儡師が人形を使った方が強いというのは事実だったらしい。人形が腐りかけの死体よりは丈夫だというが厄介だ。壊したと思っても、またすぐに立ち上がって襲い掛かってくるものもいる。

動きを封じなければいけない。私のその考えを聞きつけたように、目の前の人形の動きが止まった。人形には白い物が絡み付いていた。よく見ると、それは粘ついた糸だった。

「今の内に傀儡師を！」

頭上から聞こえる声に皆が反応する。ヨミが傀儡師の周囲にいた人形を蹴散らし、玄九朗さんが傀儡師に近づき刀を向ける。

「こ、こ……ろさ……ないの？」

「勘違いするなよ。あんたを殺したら、煉獄街で俺たちは動きづらくなる」
玄九朗さんに代わり聖が言う。玄九朗さんも、以前彼女の命を助けたが、魔狩人が減ると困ることもがあるからだと言っていた。二人は、人を殺したことがあるのかもしれない。私は手にしたナイフが重くなった気がした。私もいつか他者を傷つける必要が出てくる。ここ煉獄街で武器を持つとはそういうことなんだろう。

「あ、あ……まいわ」
「なっ……しまった」
首に回される手にに気付いた時には遅かった。五体ほどの人形が私の体に群がって身動きが取れない。一番弱い私が狙われるのは分かっていたはずなのに、情けない。
「真央！」
「こりゃ、困ったな」
叫ぶ聖に申し訳なく思う。玄九朗さんは……まったく困っているように見えない。あの人らしいといえば、らしいか。
どうやって逃げるか、考えるが上手く頭が働かない。その間も、人形の力は強まり私の首と手足を締め付ける。意識が遠のきそうになった時、状況にそぐわない陽気な声が聞こえてきた。つい幻聴が聞こえてきたのかと心配してしまうような声だ。
「やっぱり心配してた通りだよね。　マオってば、弱過ぎ。ああ、あっちこっちに傷が出来てるよ。後でいい傷薬を上げるからね」
最初に見えたのは、白いメッシュの入ったピンクの髪。声の主はカイナだった。彼は私以外など目に入っていないように、飄々とした態度で近づいてきて人形をひき剥がしてくれた。どうやら助けてくれたらしい。

顔のかすり傷の心配をするカイナを遮るように、二人の間に誰かが割り込んできた。派手な着物ですぐに流さんだと気づく。少し着衣が乱れているのは、先ほどライカンスロープに変身していたからなのかもしれない。
「彼の傷は、私が手当しますので」
穏やかだがどこか相手を馬鹿にしたような口調で流さんがカイナに話しかける。カイナの感じが変わったのが分かった。彼は、友好的な相手とそうでない相手への態度の差が激しい。
「流……君さ、黎様のお気に入りだからって調子に乗らないでよ。マオは僕の、君は黎様の。勝手に仲良くしちゃいけない」
「そちらこそ、勝手に物扱いしないでいただきたい」
「ライカンスロープは物なの。人権なんてないよ。だって、人間じゃないもの」
当たり前のように言いきるカイナに絶句する。確かに法律上は微妙な扱いを受けているが、彼らも人だ。

「そんな……酷い」
「どうして？
彼らは主に飼われて、調教されて、愛されるべき生き物なんだ。ほら、それなら人としての権利なんて不要でしょう？もちろん、その価値がない連中もいる。それを始末するのが狩人たちの役目」
彼のいう愛が分からない。ライカンスロープについて語るカイナは、彼らを見下しているようでいながら好きなものを語る子供のようだった。
魔狩人の話に移ってからか、初めてカイナは傀儡師にも視線を向けた。
「やあ、傀儡師、久しぶり。

元気？　なわけないか。相変わらず、顔色悪いよねぇ。
今日は、カリオン使ってないんだ？」
「は……はい。おお……ひさ……しぶりです」
私は、魔狩人とプルガトリオの関係はよく分からない。でも、少なくとも無関係というわけではなさそうだ。
「怯えないでよ。僕は元同業者なんだからさ。
僕は、カリオンを使っても別に構わないと思うよ。
でもさ、僕のお気に入りに怪我させたりしたら……分かってるよね？」
笑顔で傀儡師に近づくカイナに対し、彼女は何度も無言で頷いて逃げていった。明らかに脅しだ。
カイナが元魔狩人だったという事実に、少し驚く。
「元同業者っていうなら、俺もだがな。辞めてから違法行為に走った辺りまで同じとはね」
「出来損ないのライカンスロープと一緒にしないでくれる？
僕は、黎様の考えに同調して、あの方の役に立つために狩人を辞めたの！
ふらふらしてるあんたとは違うんだよ。いっその事カラスじゃなくて、蝙蝠のライカンスロープなら、あんたに似合っていたのにね」
「俺は、どっちにもいい顔なんてしてないと思うがな」

貶されているのに、玄九朗さん本人はまったく気にしていないように見える。本当に何を考えているのか分からない人だ。
そんな玄九朗さんの態度に、カイナも呆れたような表情になった。
「昔してて、両方に見放されたんでしょ」
「あり得ますね」
流さんがどさくさに紛れて同意する。
「おいおい、流こそどちらの味方だよ」
「日頃の行いが悪いから自業自得だろ」

流さんと聖は常に玄九朗さんを警戒している。信頼していないというよりは、単に嫌っているようにも受け取れる。
だからといって、流さんと聖の仲が良いかといえばそうでもない。
「あんたたちと話していると疲れるよ。
それじゃあ、マオ、またね」
「あの、ありがとう」
味方ではないが、助かったのは確かだ。私の礼に振り返ったカイナは、呆れたような変なものを見てしまったような複雑そうな表情をしていた。
「君ってさ……本当に馬鹿だよ。
そいつらと一緒にいると危ないから、さっさと家に帰るか僕のところに来ちゃえば？
ま、今のところは好きにさせてあげるけど」

「真央、大丈夫か？」
「うん。皆も大丈夫……みたいだね。
さっきの子は怪我してたけど……」
私を威嚇して逃げ去った子供は大丈夫だろうか？　傷があまり深くなければいいけれど。
「ライカンスロープだったなら心配は不要でしょう。
私たちは常人より自然治癒力も高いですから」
「茶色い犬って言ってたな。坊主、何かなくなったものはないか？」
突拍子もない玄九朗さんの質問に戸惑いつつ持ち物を確認する。
「え？　別に何も……財布がない」
「やっぱり、そんなこったろうと思った。
その犬っていうのは狼の間違いだな。
あの状況でも盗むとは、やってくれるじゃねぇか」
茶色い犬だと思ったのは、狼だったらしい。玄九朗さんは、子供のことを知っていたらしく面白がるように笑った。煉獄街では、賞

賛に値する行為だったのかもしれない。良くも悪くもたくましい子供であることは確かだ。

「リュカか……悪い、真央。見つけ次第、返させる」
少女の名はリュカというのだ、と聖は語った。彼は少女を保護し、しばらく世話をしたこともあったという。リュカは、狼のライカンスロープで俊足を生かしてスリをやっているんだそうだ。
「なんでまた、そんな幼い子供がライカンスロープに？」
「リュカは、両親を魔法絡みの犯罪で亡くしているんだ。……生き残っていた兄も黎のペットにされて亡くなった。煉獄街で生きていくには、力が必要だった」
「プルガトリオがあの子を一人にしたってこと？」

やっぱり黎やカイナの言う、愛情は理解できない。ペットにするためにたった一人の肉親から引き離すなんて……
「あなたは杏さんに愛されて育ったのですね。……あなたを見ているとそれが分かります」
流さんが優しく笑う。嬉しいといいながら、彼の笑顔にはどこか悲壮感が漂っていた。昔の母や私を思い出すと、同時に何か悲しいことや辛いことも思い出すのかもしれない。彼の過去は気になるが、聖の過去同様に気軽に聞けないな……。
「この街では、肉親の情を信じていない奴が多いがな。俺のお袋も困った人だし」
「玄九朗さんのご家族は、お元気なんですか？」
聖や流さんにも増して考えが読めないが、意外と玄九朗さんは秘密主義というわけでもないようだ。ここのところ続けて玄九朗さんの過去を知っている人に会ったから、そう感じるだけかもしれないけれど。

「俺の家族ねぇ……お袋は生きてるが、どこで何してんだか。いつの間にか弟がいるしな。育てる気がない癖に、次々生みやがってどうしようもない人だ。
兄貴や姉貴もほとんど生きてるけど、滅多に会わねぇよ」
「……そうなんですか。でも、嫌いではないんですね」
「嫌っても仕方ないからな。あれで、可愛いところもあるから憎めないんだ」
家族や昔の友を思って苦笑する玄九朗さんを見ていると、ますます彼の内面が気になる。この人は、皆が警戒するような危うさと共に、子供のような純粋さを見せる。それこそ、彼が自分の母親にいうように“どこか憎めない”人だ。

伯父の遺産相続の期限までまだ時間はある。その日までに、三人が少しでも仲良くなれていればいいな、と思った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9906k/

Blessless Blood

2010年10月10日10時39分発行